
ゼロの使い魔 ギーシュとして.....

amon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ギーシュとして……

【Nコード】

N2539M

【作者名】

amon

【あらすじ】

普通の大学生だった主人公が、何故か『ゼロの使い魔』の世界に、よりによって『ギーシュ』として転生してしまうお話。しかも、チート能力を得て、かなり強力なギーシュに生まれ変わり、原作に食い込んで行く……。

注意) チートやら転生やらを初め、設定を気になさる方は引き返してください。

プロローグ 生まれ変わって……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多々あります。その点をご理解の上で、お読みください。

プロローグ 生まれ変わって……

プロローグ

「オギャ〜！オギャ〜！（ん？なんだこれ？）」

気がついてみれば、赤ん坊になっていた。

もう一度言おう。なんだこれ？

「あらあら、どうしたの？」

誰だ、この金髪美人？

「うあ、あつ」

抱き上げられて、俺の意志とは関係なく泣きやんだ。

「おしめは濡れてないわね。じゃあ、お腹がすいたのね」

そういうと美人は、服をはだけておっぱいをポロリ……おお、美
乳

「さあ、おっぱいをあげましょうね」

「あつっ……んく、んく……」

身体が勝手に美乳に吸いつき、母乳を吸う。

飲みながら、記憶を辿って考える……。

俺は確か……さっきまで大学のコンパで仲間や女の子達と飲みに行ってたはずだ。

で、揃いも揃って酔っぱらって……お開きになって……仲良くなつた女の子なんかとメアド交換して……俺は電車に乗って帰ったはずだ。

それから……家の近くの駅で降りて……家に向かって歩いて……それから……それから……？

あれ？なんでだ？そこから記憶がブツツリ途切れてる……？

『説明しよう』

な、なんだこの声！？

『私は君達が神と呼ぶ存在だ』

はい？

『まあ、聞きたまえ。結論から言おう。実は、君は死んでしまったのだ』

はあッ！……？どういふことだッ！……？

『まあ、落ちついたまえ。これから順を追って説明するから』

最初から順を追ってくれよッ!!

『我々は、数多の虚数時空間を管理する高次元の存在 君達人間がしばしば、神と呼称する存在だ』

俺のツッコミ無視して勝手に説明始めやがった……。

『今回、偶発的に次元震が発生し、それに運悪く、君は巻き込まれて消し飛んでしまったのだ』

な……なんだとおおおツツ!!???

『シヨックなのは分かる。しかし、事実なのだ。あんな不運に見舞われた三次元存在は、全宇宙において君が史上初だ。いや、不運だったとしか言い様がない』

お、俺が……死んだ……っ、ちょっとまって!

じゃあ、なんで俺はこうして赤ん坊になつて美人の美乳を吸ってんだよ!?

『余りの不運ぶりに、これは何らかの救済措置を取るべきだということ、他の高位次元存在達と意見が一致したのだ。そこで、君には記憶と人格をそのままに、さまざまな特典と共に別次元に転生させた、という訳だ』

て、転生いい!?

『そうだ。君の魂を一部解析し、君が望む次元世界を調べて選び、そこに転生させた。全宇宙初の大不運に見舞われた分、そこで新た

な人生を謳歌するといい』

い、いや……謳歌するといいつて言われても……。

『では、説明を終えたところで、私はこれで失礼する。これ以降、君に接触を持つ事は絶対はない。では、グッドラック!』

あ、ちよつと……!

ダメだ……何となくあつた存在感が消えた……。

はあ……何だか頭が追いつかねえな……。

……まさか、転生とは……。

でも……俺が望んでた世界って……一体……?

ガチャツ!

「今帰つたぞ!クリスティーナ!我が愛しの妻よっ!」

なんか、金髪金髭のオツサンが、勢い良く部屋に入って来た。

あゝ、もしかして……あのオツサンは、俺の新しい親父で……この美人は、俺の新しいお袋?

「あなた!そんな大声を上げてはいけません!ギーシュが泣いてしましますわ!」

どうやら、俺の名前は『ギーシュ』っていうらしい……って、な

んだと？

「おお〜いかんいかん！つい勢い余ってしまった！あっはっはっはっ！」

「もう、あなただったら。この子が生まれてから、そればかりですわね」

「勿論だとも当然だとも！愛しの妻との間に授かった、我が子なのだ！それが四人目であろうとも、喜ぶに決まっているではないか！」

「うふふふ、あなたったら！」

夫婦の会話が続く中、俺は得られた情報を整理する。

分かった事は、お袋の名前は『クリステイーナ』で、俺の名前が『ギーシュ』だということだけ……。

だが、この『ギーシュ』という名前には、どうも嫌な予感がする……。

「お〜！今日も元気に乳を飲んでるな、ギーシュ！流石は、このナルシス・ド・グラモンの息子だ！」

嫌な予感が倍増する……。

ナルシス……これは確か、ライトノベル『ゼロの使い魔』のスピノフ作品『烈風の姫騎士』に出てきたナンパ男の名前だ。

まさか……神様、あんたまさか……。

「もう、あなただったら。大袈裟ですわよ？」

「そんなことはない！見なさい、この子の顔を！この私そっくりの凛々しさ！息子達は、皆、私似の美形揃い！トリスティン王国武門の誉れ高きグラモン伯爵家の将来は安泰だ！あゝはっはっはっ！」

あゝあ……確信が持てた……。

……神様が、俺の願望から選んだっていう……この世界は……
『ゼロの使い魔』世界だ。

そりゃ、ネット上の転生物の二次創作を呼んで「良いな」とか思ったりしたけども……。

神様、何も『ギーシュ』として転生させなくても良かったんじゃないかい？

ブローグ 生まれ変わって……（後書き）

訂正しました。

ギーシュは四男でした……。公式設定を間違えて覚えていました。

エピソード1 原作が始まって……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多々あります。その点をご理解の上で、お読みください。

エピソード1 原作が始まって……

エピソード1

神様に『全宇宙史上初の大不運』とまで言わせる死に方をして、俺が『ゼロの使い魔』世界の貴族として転生してから……。

あっ！という間に17年の月日が経った……。

過ぎてみると、駆け足の17年だった。

身体が赤ん坊だった所為か、起きてる時間が短くて、先ず物心ついて自由に動けるようになるまでが短く感じられた。

物心がつくまでがおよそ3年……それからの2年ぐらいは、自分の事を把握するのに使った。

ネットに転生物の二次元創作にはよくあったが、まさか自分がこの世界に転生することになるうとは、思いもよらなかった。

俺は『ギーシュ・ド・グラモン』 トリステイン王国の貴族、グラモン伯爵家の四男。神様の御厚意？で、原作のポケ役としてストーリーに深く関わる男に、転生してしまった……。 よりにもよって……。

親父の名前はナルシス、お袋の名前はクリステイーナ、そして兄

貴が三人もいる。

家族仲は良い方だ。親父は度々、浮気紛いの事をしてお袋にブチのめされているが……基本的に仲が良い。兄貴達も、弟の俺を可愛がってくれた。

屋敷で働く執事やら使用人やらメイドやらも結構良い人ばかりなので、生活環境は良好だ。

それに……四男っていうのも、俺的には良い。面倒な家督を継ぐ必要がないから、ある程度、気楽に生きていける。

で……次は、俺自身のポテンシャルの事だ。

神様が言っていた『さまざまの特典』……転生で特典と言って思い浮かぶのは、チートオリ主やら最強主人公やらだ。

結論から言うと、その想像は当たっていた。しかも、俺は相当優遇されたらしい。

まず知能 3歳の時、こっそり親父の書斎の本を開いて見てみたんだが、習ってもいないはずのハルケギニア文字が全部読めた。しかも、一度読むと内容を全部覚えられる。

次に身体 17歳の現在、俺の身長は186センチ 原作のギーシュよりも11センチも高く、前世の俺より6センチも高い。顔は前世と違って、まあまあハンサム（ちくしょうめ……）。髪は癖っ毛がウザったかっただんで、コッソリ買った秘薬でもってストレ

ートに矯正し、オールバツクにした。

その上、大して鍛えてないにも関わらず、身体はがっしりと細マツチヨ 短距離、長距離とも金メダルレベルの脚力。100キロぐらいの物なら持ち上げられる腕力。

多分、超人の領域に半歩ぐらい足を突っ込んでるだろう。

そして最後に魔法 　これが1番チートっぽい。

本で調べて簡単な杖を作り、バレない様に隠れて試してみた結果 土系統の魔法が、スクウェアクラス以上に使えた。『錬金』で、拳大の石をまるごと金塊に変えてしまったぐらいだ。しかも、いくら使っても『精神力』が切れない。どこのプロア ションリプレイですか、と。或いはコー フリークでも可。

ただ……さすがに他の系統はそこまではいかず……『火』と『水』はトライアングルぐらい、『風』は相性が悪いのかラインぐらいが限界だった。

だが、充分だ。何しろ、俺は『錬金』で黄金が作れるワケで、つまり資金面はバツチリなワケで、仮に家を出なければならなくなつたとしても、俺は何処でも生きていける。その気になれば、ゲルマニアに行つて貴族になることも可能だ。

これなら、問題なく生きていける。

あ、ちなみに……俺はよくある転生系SSの主人公とは違い、領

地の運営には一切関わってない。

確かに、読んだ本を覚えられる能力があり、前世の知識もあるにはある。が、そもそも前世の最終学歴が経済学部の大学二年生……しかも大して真面目に勉強してた訳でもない。

その程度の知識じゃ、領地繁栄なんて大それた事出来るわけないし……下手にそんな事をして、万が一、俺が家の跡取りに選ばれてもしたら面倒だからな。

で、今年には原作開始の年　つまり、俺がトリステイン魔法学院に入学してから1年が経った年だ。

俺は原作のギーシュとはまた違う、自分らしいギーシュ・ド・グラモンとして日々を過ごした。この1年は、中々楽しい日々だった。

入学早々、ヴァリエ・ド・ロレーヌとトネー・シャラントその他大勢の女子達が、黒焦げアフロの全裸で塔から吊るされたり……。

太つちよのマリコルヌや、生真面目眼鏡のレイナルと友達になつたり……。

同級生の女子から何度か告白されて、全て断つたり……、その中でモンモランシーもフツた……。入学から半年ぐらいいした時に、意外にも向こうからアプローチがあったんだ。

ただ……その時の言葉が……

「お、お付き合いしてあげても……良いわよっ?」

だったもんだから……、つい呆れてしまって……

「結構だ」

の一言でフツてしまった。原作のギーシュはともかく、俺はモンモランシーみたいなのは好みじゃない。

モンモランシーは食い下がってきたが、俺はハッキリこう言っ
てやった。

「お前は、些細な事でも浮気だ何だと、煩そうで面倒臭そうだ」

そしたら、モンモランシーは平手を見舞ってきて（勿論、避けた）
泣きながら走って行った。

その時は、悪い事をしたような気がしなくてもなかったが、原作
のギーシュよりはずっとマシだろう。

とまあ、そんな感じで面白可笑しく学生生活を送ってきて、今日
で1年……『春の使い魔召喚』の日を迎えた。波瀾万丈の『ゼロの
使い魔』が、ここから始まる！

という訳で、新二年生の俺達は、全員学院の中庭に集められた。

「いよいよ今日は、召喚の儀式であります」

コルベールのオツサンが、俺達を見渡す。

「これは、二年生に進級する為の重要な試験であり、貴族として一生を共にする使い魔との神聖な出会いの儀式であります」

そう言えば、俺はどんな使い魔が来るんだろう？やっぱり、ジャイアントモールか？

出来れば別のカツコイイ使い魔が良いなあ……。

「どんな使い魔が来るかな？楽しみだな〜！」

隣のマリコル又が、ワクワク声で言った。

「使い魔は、それぞれにお似合いの動物が来るって話だからね。僕は水属性だから、水辺の生き物。マリコル又は風属性だから、空を飛ぶ生き物が来るんじゃないかな？」

レイナールが眼鏡の位置を直しながら見解を述べる。

「使い魔は一生まんだからなあ。変な動物を呼び出しでもしたら、一生笑い物だな」

「はは……まあ、それはそうだけどな」

俺の意見に、レイナールが苦笑いを浮かべる。

で、召喚は始まり、どんどん進む。

様々な動物が召喚され、生徒達は使い魔として契約を交わしている。

その中で我が友人達　マリコル又はフクロウ、レイナールはカワセミ、それぞれ召喚した。

そして、俺の番……。

「我が名はギーシュ・ド・グラモン。五つの力を司る五芒星^{ペンタゴン}、運命に導かれし、我が使い魔を召喚せよ」

定番の呪文を唱えて、自作した長さ80センチのロッドタイプの鉄の杖をちよいと振る。すると、他の連中と同じように召喚のゲートが開いた。

そこから出てきたのは……

『ガールルル……』

虎だった。中々良い毛並み、良い顔つき、立派な体躯　これなら乗る事もできそうだ。

良かった、ジャイアントモールじゃなくて……。

さてと……。

「我が名はギーシュ・ド・グラモン。五つの力を司る五芒星^{ペンタゴン}、この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

呪文を唱え、契約のキス　すると……

『フギヤーン!』

虎が少し痛みがり、その額に『使い魔のルーン』が刻まれた。

これでこの虎は、俺の使い魔だ。

「よしよし、よく耐えたな。偉い偉い、今日からよろしくな」

『フギヤァー!ゴロゴロゴロ……』

おゝ、ジャレついて可愛い奴だ。凶体デカいけど。

「完了しました、コルベール先生」

「うむ、お見事でした。ミスタ・グラモン」

コツパゲのコルベールが頷き、俺の番が終わった。

召喚した虎を連れて、俺はマリコルヌとレイナールのところに戻る。

「おかえり、ギーシュ。いやゝ、中々の使い魔を呼んだなゝ!」

「虎は密林に住み、地を駆ける動物だからね。土属性のギーシュには似合いの使い魔かもしれないね」

マリコルヌとレイナールが、それぞれ称賛の言葉をくれた。

「ありがとう」

俺はジャレつく虎を撫でながら答えた。

早いところ、こいつに名前を付けてやらないとな……。

あ、そうだ。思い付いた。『サンガ』にしよう。

その後も、召喚は続いた……。

中でも注目を集めたのは、『微熱』のキュルケと『雪風』のタバサだ。キュルケは火蜥蜴^{サラマンダー}、タバサは風竜^{ウインドドラゴン}（ホントは風韻竜）をそれぞれ召喚した。

「え〜と、これで全員ですか？」

コルベールのオッサンは、周りを見渡して言ったが、まだ肝心のヤツが召喚してない。

「いいえ、ミスタ・コルベール！」

そう声を上げたのは、キュルケだった。

「まだ、ミス・ヴァリエールが召喚していませんわ」

あいつも性格悪いなあ。俺も人のこと言えた義理じゃないけど。

で、後ろの方でコソコソしてたルイズが前に出て来て、召喚を始めた。んだが……

ドカーンッ！

の、繰り返しだ。もう何回目だろう……？

ホントに才人が呼び出されるのか、俄かに不安になってきた……。

もし、才人が呼び出されなかったらどうなるんだ？なんて考え始めた時だった。

「宇宙のどこかにいる、我が僕よ！」

「……はあ？」「……」

突然、ルイズが変な呪文を唱え始めた。

なんだあの呪文？あんな詠唱、聞いた事ないぞ？原作はいきなり「あんだ誰？」から始まるから、どついう召喚がされたのかは書いてなかったんだよな。

「神聖で、美しく、強力な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ。我が導きに、応えなさいッ！」

で、ルイズが杖を振り下ろす。

ドカアアーンッッ！！

さっきより爆発の威力が強いが、結局爆発だ。

と、思ったんだが……

「お？」

煙が晴れると、黒髪に青いパーカーにジーンズにスニーカーが見えた。特徴が一致している。間違いないな、あれが平賀才人だ。

ふう〜、無事に才人が召喚されたな。よかった、よかった。

「あんた、誰？」

原作通り、ルイズは現れた才人に声をかける。一方、才人は、最初気絶していたが、今は目を覚ましてキョロキョロ周りを見渡している。

「誰って……。俺は平賀才人」

「どこの平民？」

ルイズが聞いても、才人は「訳が分からない」って顔をするばかりだ。まあ、無理もないだろうけど。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

「……………あはははははっ！」「……………」

誰かがそう言うと、周りの連中が笑い出す。

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は使い魔を召喚する。今、やっている通りだ。それによって現れた使い魔で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した使い魔は変更する事はできない。何故なら『春の使い魔召喚』は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わらず、彼を使い魔にするしかない」

まあ実際は、ここで無理に使い魔契約をしないということもできる。代わりに、留年か退学になって、この先新しい使い魔は呼び出せなくなるけどな。

「でも！平民を使い魔にするなんて聞いた事ありません！」

「これは伝統なんだ、ミス・ヴァリエール。例外は認められない。彼は……ただの平民かもしれないが、呼び出された以上、君の使い魔にならなければならない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、『春の使い魔召喚』の儀式のルールはあらゆるルールに優先する。彼には君の使い魔になってもらわなくてはな」

「そんな……」

ルイズはガツクリと肩を落とす。

「さて、では儀式を続けなさい」

それにしても……この時期のコルベールのオッサンで、割と容赦ないな。

「えー、彼と？」

「そうだ、早く。次の授業が始まってしまっじゃないか。君は召喚

にどれだけ時間をかけたかと思ってるんだね？何回も何回も失敗して、やっと呼び出せたんだ。いいから早く契約したまえ」

「そうだそうだ！」

「早くしなさいよ、『ゼロ』のルイズ！」

コルベールのオッサンの言葉と、周りの野次に押されるように、ルイズはチラッと才人を見て、しばし葛藤し……やがて諦めの溜め息を吐いた。

そして、徐に才人の前に歩み寄る。

「ねえ」

「はい」

「あんだ、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

そう言って、ルイズは目を瞑る。そして、手に持った小さな杖を才人に向ける。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司る五芒星^{ペンタゴン}。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

その後はまあ、原作通り　ルイズは『コントラクト・サーヴァント』の呪文を唱え、ごねる才人の頭をガシッと掴んで契約のキス

をして……

周りから野次が飛んで、ルイズが言い返して、モンモランシーと小学生レベルの喧嘩をして……

才人の左手の甲に『ガンダールヴ』のルーンが刻まれて……

「さてと、じゃあ皆、教室に戻るぞ」

才人のルーンを手帳に書き写し終えたコルベールのオツサンの一言で、儀式はお開きとなった。

オツサンが踵を返して『飛行^{フライ}』の魔法で飛んで行くのを見て、他の連中も飛び始める。

「終わりみたいだな。俺達も行こうぜ」

俺は、傍にいたマリコルヌとレイナールに声をかけた。

「そうだな。それにしても、最後に面白いものが見れたな〜！まさか平民を呼ぶなんて、さすが『ゼロ』のルイズだ！」

「人間を呼び出すなんて、相変わらずルイズは変わってるね」

マリコルヌは愉しげ、レイナールは僅かに興味ありげ、とそれぞれ反応を示したところで、二人には先に教室へ行ってもらった。

俺は、サンガに跨って教室へ向かう。

遂に『ゼロの使い魔』が始まったか……これからの俺の人生、面白くなると良いな。

エピソード1 原作が始まって……（後書き）

使い魔を虎にしたのに、深い意味はありません。今年が寅年なので、そこからの思い付きです。

訂正しました。ギーシュは四男でした……。

エピソード2 強引な決闘……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多々あります。その点をご理解の上で、お読みください。

少し加筆・修正しました。（7/2）

エピソード2 強引な決闘……

エピソード2

使い魔召喚の、翌日……。

なんだ、布団がヤケにフカフカと暖かい……。

「…………ぬ？」

と、思つて目を覚ますと、俺はベッドじゃなく、床の上で……昨日召喚した使い魔、虎のサンガを抱いていた。

道理で、暖かくてフカフカな訳だ。

「ふああ〜…………んっ！」

ゴキキ！ゴキキ！

うっん、良い目覚めだ。サンガを抱き枕にして寝るのは良いな。今後はベッドでやろっ。

「サンガ、起きろ。朝だぞ」

『フミヤ…………？』

俺が揺ると、サンガはすぐに起きた。

『クアア~~~~!』

サンガは前脚を伸ばして、欠伸をする。

さて……俺は身支度だ。

先ず、空の桶を用意する。そして、『水』系統の初歩『コンデンセイション凝縮』で、水を桶に溜める。

その水で顔を洗い、歯を磨く。ついでに、サンガの顔をタオルで拭い、歯も磨いてやる。

『フミヤアアア……ぶくぶく』

サンガはちよつと嫌そうだったが、清潔一番だ。

それが終わったら、着換える。俺は、原作の様なフリフリのアホなワイシャツではなく、普通の白いワイシャツと黒のスラックスだ。

で、着替え終わったら、朝食だ

「サンガ、行くぞ」

『フギヤア!』

サンガを引き連れ、俺は部屋を出た。

俺は食堂に行く前に、厨房に寄った。サンガの朝食を貰う為だ。

「おい、ちょっと良いか？」

厨房の入口に近いところにいた、若いコックに声をかける。

「あ、貴族様！何でしょうか？」

「ウチの使い魔の朝食を頼みたいんだが」

『フギヤア！』

「は、はい！畏まりました！」

そう返事して、コックは中に駆けて行った。

「サンガ、食事が終わったら、食堂の前で待ってるんだぞ」

『フギヤア！』

サンガの返事を確認して、俺は学院中央の本塔にある『アルヴィーズの食堂』に向かった。

ただっ広いホールに、長ぐい食卓が三列　それぞれに生徒が席に着き、食事開始を待っている。教師連中は、ロフト中階で卓に着いて歓談している。

それにしても……絢爛豪華な食堂だなあ。1年間、ここに通って毎日三食この食堂で食ってても、まだそう思う。料理は美味いけどな。

「よっ、と」

自分の席に座って、食事開始を待つ。と、その時

「凄え料理だな！」

大声が聞こえてきた。

そつちに目をやると、才人がテーブルの料理を見て、目を輝かせている。

「こんなに食べられないよ。俺！参ったな！ええおい！お嬢様！」

騒ぎながらルイズの肩をポンポン叩く才人。行儀の悪い奴だ……。

そんな才人を、ルイズがジッと睨む。

「なにか？」

才人が尋ねるも、ルイズはジッと睨んだまま……。

「ああ、はしゃぎ過ぎだな、俺。貴族らしくしないと！貴族じゃないけどな！」

まるで分かってない……。っていうか、あいつ……。どうして見ず知らずの異世界に来て、ああも平然としていられるんだろう？

これも『ガンダールヴ』のルーンの影響なのか？

そして、例によってルイズは床を指さす。才人がそこを見て言う。

「皿があるね」

「あるわね」

「なんか貧しいものが入ってるね」

そこで、ルイズは頬杖をついて言い放つ。

「あのね？ホントは使い魔は、外。あんたは私の特別な計らいで、床」

この頃のルイズは……正直、クソだ。反吐が出る……。

これから1年ぐらいかけて、徐々にまともになっていくんだろうが……。

そんな事を考えている内に、次第に食事開始の時間になった。

『偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもつたことを感謝いたします』

この1年間……いや、生まれ変わってから17年間、食事の度にこの言葉を口にしてきて慣れてしまったが……未だに思う。

これだけ豪勢な料理を前に、何がささやかな糧だ、とな。

そして、食事が終わると、サンガを連れて午前の授業だ。

大学の講義室を思い出させる作りの教室で、今日はシュヴルーズによる『土』系統の授業だ。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功の様ですわね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔達を見るのがとても楽しみなのですよ」

と、教室を見渡していたシュヴルーズのおばさんが、ルイズの横の才人に気付く。

「おやおや。変わった使い魔を召喚した物ですね。ミス・ヴァリエール」

「……………あはははははっ！！」「……………」

シュヴルーズのおばさんが惚けた声で言うと、教室中が爆笑した。あ、俺は笑ってないぞ？

「『ゼロ』のルイズ！召喚できないからって、その変歩いてた平民を連れてくるなよ！」

俺の隣に座ってたマリコルヌが、野次を飛ばす。

すると、ルイズが立ち上がって怒鳴った。

「違っわ！きちんと召喚したもの！こいつが来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』が出来なかつたんだろっ？」

教室中がゲラゲラ笑う中、二人の言い合いが繰り広げられる。

「ミセス・シュヴルーズ！侮辱されました！かぜっぴきのマリコル又が私を侮辱したわ！」

「かぜっぴきだと？俺は『風上』のマリコルだ！風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪でも引いてるみたいなのよ！」

遂にはマリコルも立ち上がり、ルイズと睨みあう。

やれやれ……マリコルのヤツ、ひよっとして実はルイズに気があるんじゃないのか？良くいるだろ、好きな女の子を虐めるヤツが……。

いい加減埒が明かなくなってきた時、シュヴルーズのおばさんが杖を振った。立ち上がったルイズとマリコル又が一瞬吊り上げられ、すっとんと席に落ちた。

「ミス・ヴァリエール。ミスタ・マリコル又。みっともない口論はおやめなさい」

シュヴルーズのおばさんのお叱りで、ルイズはしゅんと頂垂れた。だが、俺の隣の太っちょはどうかな？

「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実」

ポコッ！

「痛ッ！？な、何するんだよ、ギーシュ！」

俺はマリコルヌの後頭部を殴った。

「いつまでその悪ふざけを続ける気だ？いい加減にしろ」

「う、うう……わかったよ」

俺が軽く睨むと、マリコルヌは渋々引き下がる。

しかし、周りのクスクス笑いは止まない。多分、対象がルイズとマリコルヌの半々になったんだろう。

そこでシュヴルーズのおばさんが再度杖を振る。すると、笑っていた連中の口に赤土粘土が張り付いた。

「あなた達は、その格好で授業を受けなさい」

こうしてようやく、教室が静かになった。

「では、授業を始めますよ」

そして始まった『土』系統の授業　シュヴルーズのおばさんは、

四大系統のおさらいから始め、『土』系統が如何に重要な系統かを語った。

まあ、便利な系統であるのは間違いないな。俺みたいなチート能力を持つと、それが良く分かる。

で、続いて『錬金』の実演に入る。

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である、『錬金』の魔法を覚えてもらいます、一年生の時にできるようになった人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度、おさらいすることに致します」

そう言つて、石ころを取り出し、『錬金』をかけるシュヴルーズのおばさん。

石ころは、真鍮に変わった。知っていたのも勿論だが、俺も土のメイジだからか、見ただけで金属の種類がある程度分かるのだ。

「ゴゴ、ゴールドですか！？ミセス・シュヴルーズ！」

大声を上げたのはキュルケだ。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金出来るのはスクウエアクラスのメイジだけです。私はただの……コホン、トライアングルですから……」

聞いた話では、トライアングルは努力で何とかなるが、スクウエアは才能がなければなれないらしい。本当かどうかは知らんが……。

「ミス・ヴァリエール！」

その時、シュヴルーズのおばさんがルイズの名を呼んだ。

「は、はい！」

「授業中の私語は慎みなさい」

「すみません……」

「お喋りをする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょう」

ザワツッ！

シュヴルーズのおばさんがそう言った瞬間、教室の空気が凍りついた。

「え？私？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えて御覧なさい」

しかし、ルイズは立ち上がらない。困った様にモジモジするだけだ。

「ミス・ヴァリエール！どうしたのですか？」

「先生」

そこで口を挟んだのは、キュルケだった。

「なんです?」

「やめといた方がいいと思いますけど……」

「どうしてですか?」

「危険です」

キュルケの言葉に、教室中が頷く。だが、シュヴルーズのおばさんは首を傾げるばかりだ。

「危険?どうしてですか?」

「ルイズを教えるのは初めてですよね?」

「ええ。でも、彼女が努力家という事を聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやって御覧なさい。失敗を恐れていては、何もできませんよ?」

「ルイズ。やめて!」

またキュルケが声を上げた。だが……それでルイズに火を付けてしまう。

「やります」

ルイズが立ち上がった瞬間、教室中から小さな悲鳴が響いた。そんな中、ルイズは教卓に歩いて行く。

「……こりゃもう止められないな。マリコルヌ、レイナル、机の下に隠れる」

「言われなくても……！」

二人とも、いつになく機敏な動きで机の下に潜り、耳を塞いだ。

「サンガ、来い」

『フギヤ』

横で寝ていたサンガを呼びよせ、俺も机の下に潜る。そしてサンガの首根っこを抱きかかえて、耳を塞いでやる。

そして

ドカアアンツ！！

爆音と衝撃が、教室内を満たした。

『フギヤア！？』

「落ち着け！サンガ！恐くない恐くないっ！」

驚いてビクリと跳ねたサンガを、力づくで抑え込み、毛並みを撫でて落ち着かせる。

だが……他の連中は阿鼻叫喚の大騒ぎだ。

「だから行ったのよ！あいつにやらせるなって！」

今のはキュルケの声だな。

「もう！ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーがへびに食われた！ラッキーが！」

これらは誰かわからん。

サンガが落ち着いたのを確認して、俺は机から顔を出した。

教卓の方では、シュヴルーズのおばさんが痙攣しながら倒れている。その前に、煤で黒くなり、服がボロボロで肩やらパンツやらが見えているルイズが、何故か平然と立っていた。

ルイズは教室の大騒ぎを意にも介した風もなく、取り出したハンカチで顔を拭いながら、淡々と言った。

「ちょっと失敗したみたいね」

その言葉に、教室中が大ブーイング。

その後、水のメイジ達の『治療』^{トールンケ}で、シュヴルーズのおばさんは二時間ほどで目覚めたが、『錬金』の講義は行われなかった。そして、ルイズは教室の修理を命じられた……。

そして昼食後……。

「全く……午前は酷い目にあつたな」

食後のお茶を飲んでいると、マリコルヌが愚痴った。

「いつものことだろ。ルイズの事は、天災だとも思つて諦めるしかないって」

俺は、紅茶を楽しみながらマリコルヌを宥める。

「だけど……ただ失敗するだけならまだしも、ルイズは僕らを巻き込むじゃないか。たまつたもんじゃないよ」

レイナールまで……。

「もうルイズの話は良いって……。他に話題ないのかよ？」

と、俺が紅茶を口に運んだ時だった。

「だったら……なあ、ギーシュ！お前、今は誰と付き合っているんだよ！？」

「ブツ……！」

マリコルヌが興奮気味に言った事で、危うく吹くところだった…

…。

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

「はあ……付き合っつ？俺にそんなの女はいない。っっていうか、お前らは知ってるはずだろうが？」

「なんだよ、別の話題を求めたのはギーシュだろ？」

「そりゃそうだが……、何も俺をネタにする事はないだろうっ？マリコルヌ」

「だけど、確かに気になる話題ではあるね」

「レイナル、お前もか！？」

「たく、どいつもこいつも……」。

「だって、君は一年の頃から、その筋では有名じゃないか。告白してくる女の子をみんなフってる、って」

「たく……ミーハーどもめ……」。

「ひょっとすると、君は女の子に興味がない男色家なんじゃないか、っっていう噂もある」

「ビキ……！」

「その噂の出所を教える。すり潰してくる……！」

「ま、待った待った！所詮噂だし、どっちかって言うところには僻みみたいなものさ！君がフツた女の子に気があった奴が、どこかで流したデマさ」

「なら言うな！そして今後、おくびにも出さな！もし出したら……お前をすり潰すぞ！レイナール！マリコルヌもだ！」

「わ、わかってるさ！」

「も、勿論だとも！」

レイナールとマリコルヌが、それぞれ顔を引き攣らせて頷く。

しかし、まさかそんな噂がされていたとは……もし噂を流した奴を見つけたら、ホントにすり潰してやらねば……。

「あ、あの……！」

「ん？」

声に振り返ってみると、茶色のマントを着た一年生の女子。

「ぎ、ギーシュ様……ですよね？」

「そつだが……君は？」

栗色の髪……あ！もしかして、この娘は……。

「わ、私っ！ケティ・ド・ラ・ロッタと申しますっ！」

やっぱり……。

「俺に、何か用か？」

「は、はいっ！こ、ここ、これ！読んで下さいましっ！！」

ケティが目をギュッと閉じて差し出したのは、一通の封筒
中八九、ラブレターだな。 十

はあ、困るんだよなあ……。また変な噂が流れそうだ。

「……悪いが、それは受け取れない」

「っ！？」

ケティの身体がビクリと震える。

「君とは、先輩と後輩という関係以上にはなれない」

「ど、どうしてですか……？」

うう……涙目でこっちを見るんじゃない。

「理由は簡単。俺に、その気が全く無いからだ」

「っ……わ、わかり……ました……。う、うええ……んツッ！！」

ケティは、泣きながら走り去って行った。

「はあ……」

溜め息を吐きつつ、俺は椅子に座り直す。この時の罪悪感は、どうしようもないな……。

「相変わらずだな、ギーシュは……」

レイナールが呆れ半分といった感じに言う。

「……仕方ないだろ。半端に受け入れた方が、かえって彼女を傷つけるんだ。この方が良いのさ」

「それは、モテる男の余裕か？」

突然、マリコル又が睨んできた。

「俺にだって、選ぶ権利はある」

「ちえっ！モテる癖に、あんな可愛い女の子をふるなんて……！僕なんか声を掛けられたことすらないってのに……ブツブツブツブツ……！」

知るか、そんなこと……。

原作でもそうだったが、こいつは時々こうやって情緒不安定になるから厄介だ。女関係の事になると特に……。

「……しかし」

レイナールに目をやる。

「ん？」

こいつも、真面目そうな顔して実はムツツリスケべなんだよなあ……。

「なんだよ？」

「いや、何でもない……」

レイナールともマリコルヌとも、気が合って友達になったけど……ひよっとして俺、癖の強い人間の方と気が合うタイプなのか？

なんか嫌だな……。

「ブツブツ……！おい！ケーキおかわりっ！」

「はい！ただいま！」

マリコルヌのヤツ……ブツブツ言いながらケーキを平らげてやがった。っていうか……。

「おい、マリコルヌ。食べ過ぎじゃないのか？もう5個目ぐらいだろ？ケーキ」

「次で6個目さー！」

そんな細かい事はどうでもいい。

ケーキを6個だと……？考えただけで胸焼けしてきた。

と、そこで黒髪にそばかすのメイドが俺達のテーブルに近づいて来た。シエスタだな。

その横には……ケーキが乗ったトレイを持った才人……。

「……………」

何か、言いたそうな顔だな……。だが、敢えて言おうとはしてこない。

原作だと、香水云々で決闘イベントになるんだが……このままだと決闘イベントは無しの方向になりそうだ。

それだと、なんかつまらないな……。ここはひとつ、強引でも俺が切っ掛けを投じてみるか。

「……俺に何か言いたそうだな？そっちの給仕」

「別に……………」

「言いたい事があるなら言ってみろよ、給仕」

「……女泣かせって、ホントにいるんだあ、と思っただけだよ」

言葉に棘があるところから察するに、僻んでるな。よし……。

「それは僻みか？なるほど……確かに、お前はモテなさそうな顔だな、給仕」

平凡というか、特徴が無いというか……。

「っ……！へっ、モテる色男さんは、悩みがなさそうで羨ましいよ。あと、俺は給仕じゃない」

上手い具合に挑発に乗ってきたな。それにしても、『悩みがなさそう』とは……。

「ふん……言ってくれるじゃないか。お前、確かルイズが呼び出した奴だったな。悩みが無いのはお前の方だろ。お前からは、濃厚な『甘ったれ』の気配がする。どうせ、親に甘やかされて生きて来たんだろっ?」

今気付いたが、俺も結構頭にきてた。腹の底がカッカしてる……。ガキだな、俺も。

「うるせえボンボン野郎。一生薔薇でもしゃぶってる」

何故にここで薔薇？俺は薔薇なんか持ってないのに……。

とはいえ、イベントフラグは成立したから、まあいいか。

「どつやら、お前は俺に喧嘩を売っているらしいな。礼儀知らずの平凡面」

「誰が平凡面だ!」

才人は歯を剥き出しにして唸る。単純な奴……。

「おーおー、威勢が良いな。ようし、食後の運動代わりだ。遊んでやるよ、甘ちゃん」

「面白え……！」

よしよし、釣れた釣れた。

このイベントはやっておきたかったし、俺としては別の興味もある。俺のチート能力と、才人の『ガンダールヴ』……どっちが上かっという興味がない。

「ここでやんのか？」

「ここは食卓だ。喧嘩にはふさわしくない。向こうに、『ヴェストリの広場』と呼ばれる広場がある……そこでやるう。待っててやるから、準備と覚悟が済んだら来な」

才人に挑発的な笑みを向け、俺はその場を後にした。

S I D E : 才人

あの野郎……！言うだけ言ってさっさと行きやがった。

そもそも、あいつは第一印象からして気に入らない。ルイズほどじゃないけど、結構可愛い女の子にラブレター渡されたくせに、それを断りやがった。俺なんか、そんなもん貰ったことすらないのに……。

おまけに俺を『モテなさそう』とか『平凡面』とか小馬鹿にしく

さった。

背も高いし、ガタイも良いし……おまけにハンサム（ムカつく）
だけど……、絶対ひと泡吹かせてやる！

「あ、あなた、殺されちゃう……」

「はあ？」

「貴族を本気で怒らせたなら……」

傍にいたシエスタが、なんでか震えてた。

安心させようと思って、俺は笑いかける。

「大丈夫。あんな奴に負けるかっての。何が貴族だっつ」

「っ……っ！」

ダッ！

「あっ！？」

走って逃げに行っちゃった。

なんなんだよ……？もしかして、あいつってそんなに強いのか？

「あんた！何してんのよ！見てたわよ！」

「よおルイズ」

「『よお』じゃないわよ！何勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

いや、決闘じゃなくて喧嘩だけど……。

「あんだ！何してんのよ！見てたわよ！」

「だって、あいつが、あんまりにも、ムカつくから……」

まあ、俺だって少し挑発する様なこと言っただけど……。

ルイズは溜め息を吐いて、やれやれって感じで肩を竦める。

「謝っちゃいなさいよ」

「なんで？」

「怪我したくなかったら、謝って来なさい。今なら許してくれるかもしれない……いえ、ギーシュなら許してくれるわ」

「ふざけんな！なんで俺が謝らなくちゃならないんだよ！先に馬鹿にしてきたのは向こうの方だ！」

「いいから」

ルイズが強い調子で俺を見てきた。

「いやだね」

馬鹿にされた俺が、どうして下手に出なきゃならないんだ……ふ

ざけんなっつーの！

「分からず屋ね……。あのね？手加減はしてくれるだろうけど、あんたは絶対に勝てないし、怪我するわ」

「そんなの……。やってみなくちゃわかんねえだろ」

「聞いて？平民はメイジに絶対に勝てないの！」

ちえ……。また平民かよ。もう聞き飽きたぜ。

「確か……。『ヴェストリの広場』はあっちだって、あの野郎が言うてたな」

俺はルイズを無視して、さっきギーシュとかいう奴が指さした方に歩き出した。

「あ、ちよつと！？ああもう！ホントに！使い魔のくせに、勝手なことばかりするんだから……。！」

後ろでルイズがギャーギャー言ってるけど、無視だ無視。

S I D E O U T

わらわらわら……

「……。なんだこの野次馬の数は？」

『ヴェストリの広場』に先に着いて、才人を待っていた俺は、周囲を見渡して思わず呟く。

人、人、人……噂を聞き付けたんだろうが、これは集まり過ぎだろ？

と、呆れていたところへ……才人が到着した。

「結構早かったな？もう覚悟は出来たのか？」

「うるせえ。覚悟するのはお前の方だ」

威勢の良いことだ……。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民だ！」

「……………うおーッ！！……………」

誰かがそう言つと、野次馬が騒ぎ出す。暇な奴らだな……。

「……………さて、じゃあ始めるか。こっちはお前に合わせて、素手でやっつてやる」

と、俺が言って自前の杖を地面に放り出した瞬間

ダッ！

才人は俺に向かって突っ込んできた。

10メートル程の距離を、全力疾走　　先手必勝ってか。

「おらぁっ!」

拳を振り上げて、目の前に迫り来る才人。

「せつかちな奴だな……」

パシッ!

「え……!?!」

才人が繰り出したメチャクチャな右パンチを、ハエを払う様に左手で弾く。そしてすかさず腕を取り

グイッ!

「おわぁッ!?!」

一本背負い。

ドサッ!

「ぐえッ!?!」

潰れた蛙の様な声を上げて、地面に背中から落ちる才人。あれは受け身が取れてないな。

「……ふむ」

俺は自分の手を見つめる。

前世の頃から柔道はおるか、格闘技の類は一切やった事がない俺なのに、今の一本背負いに繋がる一連の動き……我ながら、まるで流れる水の如く自然で無駄のない動きだった。

どうやら、これも神様がくれた特典の一つらしい。

「う、ぐ……！く、くそ……！」

おっと、考えている内に才人が起き上がってきた。

「……まだ、やるのか？」

「あ、当たり前だ……ッ！」

受け身が取れなくて背中を強かに打ちつけた所為だろう。才人の顔が苦痛に歪んでいる。

「ギーシュ！」

と、そこへルイズが駆けこんできた。

「ルイズか。何か用か？」

「『何か用か』じゃないわよ！もうやめて！大体ねえ、決闘は禁止じゃない！」

「これは決闘なんて大袈裟なもんじゃない。ただの喧嘩だ。その証拠に、俺は魔法を使ってないだろ？」

今の俺が『クリエイト・ゴーレム』なんか使ったら、いくらなんでも勝負にならない。決闘だって、周りの奴らが勝手に言ってるだけだしな。

「それは、そうだけど……でも！貴族が平民と喧嘩だなんて……」

「なんだルイズ、随分必死に止めるな？もしかして、あいつに気でもあるのか？」

「誰がよ！やめてよね！自分の使い魔が、みすみす怪我するのを、黙って見ていられるわけじゃない！」

ルイズが真っ赤になって反論する。

「……だ、誰が怪我するって？俺はまだ平気だったの」

「サイト！」

立ち上がった才人を見て、ルイズが悲鳴のような声で叫んだ。

「……へへへ、お前、やっと俺を名前で呼んだな」

才人は、微妙に嬉しそうに笑う。

「わかったでしょう？平民は、絶対にメイジに勝てないのよ！特にギーシュは、私達の学年の中で、戦闘技能が一番の成績を誇ってるのよ？あんたが逆立ちしたって勝てる相手じゃないのよ！」

「……ちょ、ちょっと油断しただけだ。いいからどいてろ」

才人はルイズを押しやり、一步前に出た。

「始めておいて言う台詞じゃないとは思うが……無理はしない方が
良いぞ？背中、痛むだろ？」

「……うるせえ」

本当に親切心でした忠告にも、才人は耳を貸さない。俺を睨みながら、ズンズン歩いて来る。

そんな才人の肩を、ルイズが追いついて掴む。

「やめなさいよ！バカ！どうして向かって行くのよ！？」

しかし、才人はその手を振り払った。

「ムカつくから」

「ムカつく？メイジに負けたって恥でも何でもないのよ！」

「うるせえ」

「え？」

「いい加減、ムカつくんだよね……。メイジだか貴族だか知んねえけどよ。お前ら揃いも揃って無駄に威張りやがって。魔法がそんなに偉いのかよ、アホが」

俺は別に、威張った覚えはないんだが……。

「で？結局続けるのか？」

俺が声をかけると、才人は少しこつちを睨み、次いでニヤリと笑った。

「全然きいてねえよ。たかが一本背負い一回決めたぐらいで、勝った気でいんな。バカ！」

「ふん……負けん気だけは一人前だな。後悔しても知らんぞ……」

それからはもう、ワンサイドゲームだった。

才人のメチャクチャな拳は俺には全く当たらず……逆に、俺が繰り出す攻撃は……

ガッ！

「ぐあっ!?!」

拳も……

ドカッ！

「ぐえっ!?!」

蹴りも……

ブンッ！

「うわぁッ!?!」

投げ技も……

全てが綺麗に決まってしまっ……。

才人は、幾ら俺に叩きのめされても、立ち上がって来る。そして、俺はそうして向かって来る才人を叩き伏せる……その繰り返しだ。

おかげで、才人はもうボロボロだ……。顔は腫れ上がって、口元からは血が垂れているし、服も土埃で汚れている……。

ドサッ……！

そして、遂に才人は倒れた。その才人に、ルイズが駆け寄る。

「お願い……もう、止めて」

ルイズの声は涙声だった。

「……泣いてるのか？お前」

絞り出した様な声で、才人がルイズに声をかけた。

正直、気分が良くない……。まるで、弱い者いじめをしている気分になる。

「泣いてないわよ。誰が泣くもんですか。もういいじゃない。あん

たはよくやったわ。こんな平民、見た事ないわよ」

「同感だ」

俺はそこで口を挟んだ。

ルイズと才人が俺の方を向く。

「お前……サイトとか言ったな。さっき、お前を「甘ちゃん」呼ばわりしたことは取り消す。ここまでやるとは、見上げた根性だ。それに……色々言っただけにした事も詫びる。悪かった……」

「ギーシュ……」

「お前……」

ルイズと才人が、信じられない物を見る様な目で見てきた。

それと平行して、周囲もざわつき始める。

「……だが、ここまで騒ぎがデカくなってしまった以上、この喧嘩にも一応の勝敗を付けないとならない。そこで聞く……まだ、続けるか？」

「……ああ、続けようぜ」

「サイト！」

才人は少し考えた後、身体を起こして立ち上がった。ルイズがそれを見て叫ぶ。

本当に、見上げた根性だな……。

俺は、さっき放り出した杖を拾い、呪文を唱えて地面に向けて振り下ろした。

パァァ！

才人の目の前の地面が僅かに光り、そこに一本のブロードソードが出来上がる。

自惚れる訳じゃないが、このまま素手の喧嘩を続けなければ才人は負ける。そうすると『あゝ、やっぱり平民は貴族に勝てないんだ』で話が終わってしまい、才人が惨めになる。特に俺は、ここまで魔法を使っただけだ。

原作におけるこのイベントの意味は、『ただの平民だと思っていた才人が、実は凄い力を持っているんだ』とルイズを含めた周囲の人間が認識することにある。

あの疲労困憊の状態じゃ、もうまともに向かって来る事もできないだろう。だから、もう『ガンダールヴ』の能力に頼るしかない。この目で『ガンダールヴ』の力を見てみたい気持ちもあるしな。

俺も自分の杖に『ブレイド』の魔法をかける。普段黒光りしている鉄の杖が、やや黄色っぽい光の刃を纏う。

「ならば、次で決着をつけよう。その剣を取れ」

俺が言うと、才人はブロードソードに手を伸ばす。しかし、その

手をルイズが阻んだ。

「だめ！絶対だめなんだから！あんたもうボロボロなのよっ！？これ以上やったら、本当にどうなるかわかんないわ！もう良いじゃないっ！何、意地張ってるのよっ！？」

「……俺は元の世界にや、帰れねえ。ここで暮らすしかないんだろ」
才人は独り言を呟く様に、言った。その目は、ルイズじゃなく剣を見ている。

「そうよ。それがどうしたの！？今は関係ないじゃない！」

「使い魔でいい。寝るのは床でもいい。飯は不味くたっていい。下着だって、洗ってやるよ。生きる為だ。しょうがねえ」

「……」

今考えると、この順応力もどこかおかしいな。普通の精神なら、とてもまともではいられない状況なのに……。

もしかすると、この時すでに『ガンダールヴ』のルーンによる精神改造が始まっているのかもしれない。まあ、憶測に過ぎないが……。

「でも……」

才人は、空いた左の拳を握り込む。

「でも、何よ……」

ジャキイイイインツ!!

耳が痛くなるぐらいの金属の激突音　俺の杖と、才人の剣がぶ
つかり合った音

「……………」

俺と才人は、お互いに無言……背中合わせに立っていた。

見れば、手には杖の姿がない。代わりに、物凄い痺れが残ってる
……………。

「……………」

後ろを振り返ってみると……才人の手には、剣が握られていた。
ただし、刀身の半分が無くなった状態の剣が……………。

「……………引き分け、だな」

「ああ……………」

才人は呟く様に言うと、折れた剣を手放して振り返った。

「……………うおおーッツツ!!」「……………」

俺と才人が歩み寄る中、見物していた連中がまた騒ぎ出した。

「あの平民、やるじゃないか!」

「ギーシュと引き分けたぞ!」

もう、勝手に騒いでる……。

俺と才人はお互いすぐ近くまで歩み寄る。

「やるじゃないか」

「へ、へへ……お前も、な……」

と、握手でもしようかと思ったところで、才人が膝から崩れ落ちて気絶した。

「おっと」

地面に突っ伏す寸前で、襟首を掴んで止める。

「サイト！」

倒れた才人を見て、ルイズが駆け寄ってくる。

「心配するな。疲れて気を失っただけだ。ほら」

「ぐー……」

吊り上げてルイズに見せると、才人は鼾いびきをかいていた。

それを見ると、ルイズはホッと安堵の溜め息をつく。

ところで、俺の杖は……？お、あった。随分飛んでたな。

杖を拾い、寝こけてる才人に『浮遊^{レビテーション}』を掛けて浮かせる。あゝ、
楽チン楽チン

「さて……ルイズの部屋まででいいか？」

「え、ええ……！」

ルイズは目をごしごし擦りながら頷いた。

その後……才人をルイズの部屋に送り、俺はそのまま帰った。

才人は、疲労はともかく怪我はそれほど酷くはない（そういう戦
い方をした）から、それほど大袈裟な治療は必要ないだろう。

とにかく、なんとか無事に決闘イベントを終えられて良かった。

エピソード3 フーケ現る……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多々あります。その点をご理解の上で、お読みください。

エピソード3 フーケ現る……

エピソード3

あの決闘から一週間が経過……。早過ぎ？知らんよ、そんなこと。とにかく、あの決闘の後からをかいつまんで説明しよう。

先ず才人の事だが……あいつは、ぶっ倒れてから丸一日で目を覚ました。

ルイズが、高価かどうかは知らないが、治療用の秘薬を取り寄せて使ったそうだ。

で、傷もすっかり治った状態で会った時に謝られた。

「悩みがなさそうとか、ボンボンとか……色々言っ、悪かった。ごめん……」

俺としては、大して気にしていなかった事なので、そのまま「気にしていない」と言っておいた。

で、それ以降、それなりに話をする様な仲になった。

次に、ルイズを含む才人の評価だが……概ね上がったと言える。

シエスタやマルトーを初めとする学院の奉公人（平民）達は、奴を『我が剣』と呼んで受け入れているようだ。

ルイズも、まあ表面上は変わらない。些細な事で、股間を蹴り上げたり叩きのめしたり飯抜きにしたり飯抜きにしたり。が、少しでも才人への評価を改めているのは、なんとなく分かる。

あの二人は、あれで上手くやっていくだろう。

が、ある日……才人に相談を受けた。曰く

「最近さ……キュルケの使い魔のフレームがさ、なんか俺のこと見てるんだよ。なんでだろう？」

事情は知っている。どうやら、しっかりキュルケは才人に興味を持っていたようだ。

これはデルフリンガー入手に必要なフラグ。そのまま続けさせた方が良く、という訳で

「さあ？」

と、すっとぼけておいた。答えは直に分かる。

そして、イベント発生の『虚無』の曜日がやってきた。

俺は朝から、サンガに跨り、ブルドンネ街を訪れていた。

サンガを街の外で待たせ、大通り　とは名ばかりの狭くゴミゴミした通りに面した露店を巡っている。

別に才人とルイズを待っている訳じゃない。単純に、休日ショッピングだ。

この世界には、漫画もDVDも存在しないが、代わりに面白い秘薬やマジックアイテムが売られている事がある。FFやドラクエみたいなもんだ。

俺の所持金は無限だから、幾らでも買い放題　だからと言って、山のように衝動買いはしない。

お、この銀のネックレス、良いデザインだな。

「おい、店主。こいつは幾らだ？」

「へえ。こちら、純銀製の首飾りになりました、お値段が50エキユーになりますか」

「買った」

「へえ！お買い上げありがとうございますー！」

言うておくが、これは衝動買いじゃないぞ？ちゃんと吟味しての買い物だ。

見た所、このネックには『固定化』が掛かってないみたいだから、後で掛けておかないとな。

その後、秘薬やら本やらを『多少』買いこんで、昼食を取り、土産の肉を買ってからサンガのところへ戻り、サンガの食事が終わってから学院に帰った。

帰りついたのは、夕方 『アレ』が来るのは夜だから、それまで休憩するでしょう。

そして、夜が来た……。

二つの月が照らす中、俺は一人、中庭をぶらぶら歩く。

で、しばらくして、ルイズと才人とキュルケとタバサが現れた。

「なんだ、お前ら？お揃いで」

「あら、ギーシュじゃない」

俺を見とめて声を上げたのはキュルケだ。続いて、ルイズが言う。

「こんな時間に、こんなところで何してんのよ？」

「月夜の散歩。そして、今の質問をそっくりお前らに返す」

「……決闘だってよ」

俺の問い返しに、才人が疲れた声で答えた。

「決闘とは、穏やかじゃないな。なんだってそんな事に？」

事情は知ってても、話の流れで尋ねる。それにも才人がげんなり声で答えた。

まあ、原作通りの事情　才人が、デルフリンガーとキュルケが買ってきた剣のどっちを使うかを、ルイズとキュルケが決闘で白黒つけて決めようってことだ。

「ギーシュ、お前から何とか言ってくれよ……」

「ハッキリ決めないお前が悪い」

才人の助けを求める言葉を、俺はスツパリ斬って捨てた。

「だが……魔法で直接戦うのは、確かに危ないな。どっちも、大なり小なり怪我をするぞ」

「確かに、それはバカらしいわね」

キュルケが顎に手を当てて言った。

「そうね」

ルイズも頷く。

と、そこでタバサがキュルケに近づいて何かを呟き、才人を指差

した。

「あ、それいいわね！」

そう言つて笑みを浮かべたキュルケが、今度はルイズに耳打ちする。

「あ、それいいわ」

そしてルイズも頷いた。

で……

「おーい……。本気か？お前ら」

ロープで縛られ、塔の上から吊るされた才人が、情けない声を上げる。

その下の中庭には、ルイズとキュルケと俺　塔の屋上には、シルフィードに跨ったタバサがそれぞれ待機している。

「ギーシュ〜！助けてくれよ〜！」

「自業自得だと思つて、諦めろ」

ここで俺が助けに入ると、『アレ』のイベントに支障が出る。俺の望みを叶えるには、今夜のイベントは必須だ。

それに何より、下手をすると俺までとばっちりを喰うからな……。

「いいこと？ヴァリエール。あのロープを切って、サイトを地面に落とした方が勝ちよ。勝った方の剣をサイトは使う。いいわね？」

「わかったわ……」

キュルケとルイズが、ルールの確認をする。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらいはハンデよ」

「いいわ」

「じゃあ、どうぞ」

余裕で促すキュルケ。ルイズは硬い表情で、杖を構える。

同時に、屋上のタバサが吊るした才人を風で揺らし始めた。才人が左右に、結構大きく揺れる。

「……………」

ルイズは少し悩む。そして、徐に『ファイヤーボール炎球』の呪文を唱え始めた。

そして呪文が完成し、ルイズは気合を入れて杖を振る。

しかし……

ポオオンッ！

火の玉は出ず、一瞬遅れて才人の後ろの壁　　つまり宝物庫の壁
が爆発し、亀裂が入った。

「殺す気かー！ー！」

爆風で身体が揺れる状態で、才人が怒鳴る。

「ゼロ！『ゼロ』のルイズ！ロープじゃなくて壁を爆発させてどう
するの！器用ね！」

腹を抱えて盛大に笑うキュルケ。

「あなたって、どんな魔法を使っても爆発させるんだから！あつは
っは！」

ルイズは悔しそうに膝をついた。

「さて、私の番ね……」

そう言ったキュルケは狩人の目……。タバサは才人を揺らす
が、キュルケは余裕の笑みを浮かべる。

そして、慣れた調子で『ファイヤーボール炎球』の呪文を唱え、杖を振った。

ポオウツ！

直径20センチ程の火の球が飛び、才人を吊るすロープを焼き切
る。

才人は落下するが、タバサが『レビテーション浮遊』でレスキュー　　地面に激

突はせず、ゆっくりと降りた。

「あたしの勝ちね！ヴァリエール！」

キュルケは勝ち誇り、ルイズはいじけて草をむしる。

まあ、こっちの事情は俺にとってはどうでもいい……。

さあ、壁には亀裂が入ってるぞ。さっさと来い、『土くれ』のフーケ。千載一遇のチャンスだぞ

と、心の中で思い続けていた時

ズゴゴゴゴ……

来た！『土くれ』のフーケの十八番　　30メートルの土くれゴ
ーレム！

「な、なにこれ！？」

ゴーレムに気付いたキュルケが、目を見開く。

そうしている間にも、ゴーレムはキュルケの方　　正確には、宝
物庫の壁の方に歩いて行く。

「きゃあああああああ！」

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出した。色々偉そうなと言っ
て、こっぴつ時は逃げ出すのかよ……。

「おい！置いて行くなよ！」

才人は逃げ出したキュルケに向かって叫ぶが、キュルケは聞こえなかったようだ。

その間にも、ゴーレムはどんどん迫っていく。

「な、なんだこりゃ！デケえ！」

才人はジタバタもがく。が、如何せんグルグル巻きの海老フライ状態で逃げられない。

しょうがないなあ……。

ダッ！

「才人！今ロープを切ってやるから動くな！」

俺は杖に『ブレイド』を掛けて、才人を縛る縄を切った。

「サンキュー！ギーシュ！」

「礼はいいからお前はルイズを連れて逃げる！俺も逃げる！」

ダッ！

早口で言い残し、俺はその場から逃げだした。

いや、もちろんまともに戦えば勝てるぞ？だが……ここでフーケを撃退したんじゃない駄目なんだ。色々と、段取りってものかな。

その内、俺と才人とルイズはタバサのシルフィードにレスキューされて、上空に逃れた。

その後、ゴーレムはルイズが入れた亀裂から、宝物庫の壁をぶち破り、フーケは中から『破壊の杖^{ロケットランチャー}』を奪取　ゴーレムで逃げて行った。

そして翌朝……学院は大騒ぎとなる。

「『土くれ』のフーケ！貴族達の財宝を荒らしまくっているという盗賊か！魔法学院にまで手を出しおって！随分と舐められたもんじやないか！」

「衛兵は一体何をしていたんだね？」

教師達は、現場である宝物庫に集まってゴチャゴチャと勝手な事を言い合っていた。

その内容は、建設的とは程遠い……。

「衛兵などあてにならない！所詮は平民ではないか！」

あてにならないと知っているなら、あんたらがしっかり警戒しろよ……。

「それより当直の貴族は誰だったんだね！」

という教師の発言で、シュヴルーズのおばさんがビクリ！と震えた。

「ミセス・シュヴルーズ！当直は貴女なのではありませんか！？」

そう追及したのは、教師の一人で『疾風』のギトーだ。

シュヴルーズのおばさんは、震えながら泣きだす。

「も、申し訳ありません……」

「泣いたって、お宝は戻ってこないのですぞ！それとも貴女、『破壊の杖』を弁償できるのですかな！？」

「私わたくし、家を建てたばかりで……」

やれやれ……責任の所在が分かると、途端に追及が始まる。こつこつという場面は、見るのも嫌いだ……。

「これこれ。女性を苛めるものではない」

やっとオスマンのじいさんが現れた。

その後、ギトーは食い下がったが、オスマンじいさんの「当直をまともにした教師は何人いるか？」発言で静まり、責任の追及合戦は打ち切られた。

この時ばかりは、オスマンのじいさんを尊敬したね。

で……今度は俺達の事情聴取だ。オスマンじいさんに促されたルイズが、代表して事情を説明した。

「あの、大きなゴーレムが現れて、ここの壁を壊したんです。肩に乗ってた黒いメイジがこの宝物庫の中から何かを……その『破壊の杖』だと思えますけど……、盗み出した後、またゴーレムの肩に乗りました。ゴーレムは城壁を越えて歩き出して……、最後には崩れて土になっちゃいました」

「それで？」

「後には、土しかありませんでした。肩に乗ってた黒いローブを着たメイジは、影も形もなくなっていました」

「む……」

オスマンじいさんが、難しい顔で髭をしごく。

「後を追おうにも、手掛かり無しというわけか……」

と、そこでオスマンじいさんが、ふと気付いてコルベールのオッサンに尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその……、朝から姿が見えませんが」

「この非常時に……、何処に行ったのじゃ」

「どこなんでしょう？」

噂をすれば影　そこでタイミング良く、ミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！何処へ行っていたんですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」

「調査？」

オスマンじいさんが怪訝な顔で言う。

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこの通り。すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、これが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査を致しました」

「仕事が早い。ミス・ロングビル」

そりゃ、ロングビルはフーケだからな。俺は知ってるから思うのかもしれないが、誰一人ロングビルの迅速過ぎる行動を不審に思わないってのは、どうなんだろうな？

コルベールのオッサンが慌てて促す。

「で、結果は？」

「はい。フーケの居場所がわかりました」

「な、なんですと！」

コルベールのオッサンを筆頭に、教師達がどよめく。

「誰に聞いたんじゃね？ミス・ロングビル」

「はい。近在の農民に聞きこんだところ、近くの森の廃屋に入っていく黒ずくめのローブの男を見たそうです。おそらく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

オスマンじいさんの問いに答えるロングビルの言葉に、今度はルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ？それはフーケです。間違いありません！」

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で4時間といったところでしょうか」

じゃあ往復8時間ってことだ。どうして誰も疑問に思わない……？

「すぐに王室に報告しましょう！王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては！」

コルベールが叫んだが、オスマンが目を見開き、結構な迫力で怒鳴る。

「馬鹿者！王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまおう！その上、身に掛かる火の粉を己で払えぬようで、何が貴族じゃ！この件は、魔法学院の問題じゃ！当然、我らの手で解決する！！」

で、オスマンじいさんは咳払いで落ち着き、その場の全員を見渡した。

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ」

よし、行こう。俺は杖を掲げた。

「ミスタ・グラモン！」

シュヴルーズのおばさんが、声を上げた。

「何をしていますのです！？あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて……」

「では、誰か行くんですか？」

「……………」

俺が目を向けると、教師達は目を逸らした。

誰も行く気はない、と……。どうしようもないな、ここの教師陣は……。

「誰も行かないみたいですね。なら、俺が志願しなければ搜索隊が成り立たないでしょう。ここは、この『白金しろがね』のギーシュにお任せ

あれ」

随分名乗るのが遅れたが、俺の二つ名は『しろがね白金』曰く、『しろ白がね金』のギーシユ。『はくぎん白銀』じゃなく、『はくぎん白金』と書いて『しろがねしろがね』なのがミソだ。

その二つ名の由来は、近い内にお見せしよう。

と、俺に続いてルイズが杖を掲げる。

「ミス・ヴァリエール！」

シュヴルーズのおばさんがまた声をあげた。他の教師達も、同じ様に驚き顔でルイズに注目した。

更に、キュルケも杖を挙げる。

「ミス・ツエルプストー！君まで！」

今度はコルベールのオツサンが声をあげる。

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ」

更に続いて、タバサも杖を掲げる。それを見て、キュルケが声を掛けた。

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」

「心配」

キュルケは感動した表情で、タバサを見つめる。ルイズも、タバサに感謝を述べる。

「ありがとう……タバサ……」

そんな三人の様子に、オスマンじいさんは好々爺っぽい笑みを浮かべて「うむうむ」と頷いた。

「そうか。では、君たちに頼むとしようか」

「オールド・オスマン！私は反対です！生徒達をそんな危険にさらすわけには……」

「では、君が行くかね？ミセス・シュヴルーズ」

「い、いえ……、私は体調わたくしがすぐれませんので……」

結局行かないなら言つなよ……。

「彼らは、実際に敵を見ておる。その上、ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だとも聞いているが？」

じいさんの発言に、教師達を含め、キュルケとルイズも驚いた表情でタバサに注目する。

『シュヴァリエ』か……、確かその称号を取ると国から年間500エキューの年金が出るんだよな。まあ、俺は自分で幾らでも金貨を作るからあんまり意味ないけどな。

「ミスタ・グラモンは、トリステイン王国の武門の名門グラモン伯

爵家の出で、戦闘技能において学年一の成績を誇る強力なメイジだと聞いているが？」

そりゃあ、チート能力持ちの転生者ですから。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力であると聞いているが？」

キュルケは、じいさんの褒め言葉に得意げに髪をかき上げ、不敵な笑みを浮かべる。

そして、最後にじいさんはルイズに目を向けたが、そこで少し言葉葉を濁す。

「ミス・ヴァリエールは……その、数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、なんだ、将来有望なメイジと聞いておるが？しかもその使い魔は！」

汗ダラダラ……。

辛くもルイズを褒めることに成功したじいさんが、誤魔化す様に声を上げて才人に目を向ける。

「平民ながら、そのミス・グラモンと決闘して引き分けたという噂だが」

決闘……。最初はただの喧嘩のつもりだったんだが、まあ、最後は剣で勝負までしてしまったし……。もう決闘でいいか。

「この面子に勝てるという者がいるならば、一步前に出たまえ」

じいさんのいつになく威厳のある声で言った台詞に、反応できる者は誰もいない。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

「……杖にかけて!」「……」

俺、ルイズ、キュルケ、タバサの四人が同時に声を上げ、それぞれ礼を取る。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。魔法は目的地に着くまで温存したまえ。ミス・ロングビル!」

「はい。オールド・オスマン」

「彼らを手伝ってやってくれ」

「元よりそのつもりですわ」

ロングビルはオスマンに一礼し、準備に取り掛かると言ってその場を後にした。

さあて……いよいよ来たぜ、フーケ討伐イベント。だが、俺はフーケを討伐なんてする気はない。

もっと平和的な解決を目指すのだ……平和的な、フフフ。

エピソード4 人材確保……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多々あります。その点をご理解の上で、お読みください。

エピソード4 人材確保……

エピソード4

パツカ、パツカ、パツカ……

フーケ捜索隊 という名の討伐隊に志願して、現在馬車に揺られて街道を移動中。

席順は……御者席にロングビル、荷台右側に俺、才人、ルイズの順、左側にキュルケ、タバサの順だ。

道が殆ど整備されてない所為で、ガタガタ揺れて仕方がない。

「ミス・ロングビル……、手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

キュルケが、黙って手綱を握っていたフーケことロングビルに声をかけた。

「いいのです。私は、^{わたくし}貴族の名を失くした者ですから」

「だって、貴女はオールド・オスマンの秘書なのですよ？」

「ええ、でも、オスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘らないお方です」

「差しつかえなかったら、事情をお聞かせ願いたいわ」

しかし、ロングビルは答えない。他人に話せるような軽い事情じゃないからな……。

「いいじゃないの。教えて下さいな」

キュルケは荷台から身を乗り出して、ロングビルににじり寄りうとする。

ヒュッ！

俺は杖を引き抜き、キュルケの目の前に突き出した。

「っ！な、何よ？ギーシュ」

「貴族の名前を失くした理由なんか、他人に話すような事じゃない。それにお前、最初に『差しつかえなかったら』って言っただろ？ミス・ロングビルは差しつかえあるから言わないんだ。それを興味本位でしつこく聞き出そうとするのは、感心しないな」

「……ふん」

キュルケは面白くなさそうに鼻を鳴らし、荷台に座りなおした。

「暇だからお喋りしようと思っただけじゃないの」

「なら、もっと楽しい話題を振れよ」

「……」

俺のキツ目の言葉に腹を立てたか、キュルケは視線を逸らした。

誤解がない様に言っておくが、俺は別にキュルケが嫌いな訳じゃない。だが、誰と限らず、他人に無遠慮な態度が嫌いなだけだ。

「ぶっ……」

小さく嘖き出したのはルイズだった。キュルケがやり込められたのが可笑しくて嬉しいらしい。

それはキュルケの耳にも届いたらしく、笑ったルイズをジロリと睨む。

しかし、それも一瞬の事。すぐに思いついたように余裕の笑みを浮かべ、才人とルイズの間に割り込んだ。

俺は、サッとキュルケが元座っていて空いた場所に移った。

「ダーリン はい、これ」

キュルケは色気たっぷり流し目を才人に送ると、金色で柄に寶石っぽいガラス玉を付けた剣を渡した。

ありや安物だな……。

「あ、ああ……」

才人はそれを受け取る。その時にチラッとルイズの方を見た。

「勝負に勝ったのはあたし。文句はないわよね？『ゼロ』のルイズ」

「……」

キュルケが勝ち誇り気味に言うが、ルイズは顔を逸らして何も言わなかった。

だが、俺の位置からはルイズの表情が若干見える。物凄く悔しそうな、屈辱を堪えている顔……、本当にわかりやすい小娘だ。

そうこうしている内に、馬車は森に入った。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

馬車が入れない細い道の前で、ロングビルがそう言った。

俺達は馬車から降り、彼女の先導のもと道を進む。隊列は、ロングビル・俺・ルイズ・才人・キュルケ・タバサの順だ。

「なんか、暗くて怖いわ……、いやだ……」

「あんまりくつつくなよ」

「だってー、すごーくー、こわいんだものー」

後ろで、キュルケと才人のじゃれる声が聞こえるが、無視だ。先を急ぐ。

そして、開けた場所に出た。

森をくり抜いたような空き地、その中心に佇む元木こり小屋の廃屋。俺達は森の茂みからその廃屋を眺める。

「わたくし私の聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

その話を聞いて、俺達は取りあえず作戦会議を始める。

タバサが地面に絵を描いて作戦を説明した。

先ず偵察兼囿が小屋を偵察。で、フーケがいれば誘き出し、いなければその合図を出す。

フーケがいて（いないけど）、外に出てきたら俺達の魔法一斉集中砲火で即時粉碎。以上が、タバサの作戦だ。

「で、偵察兼囿は誰がやるの？」

「お前に決まってるだろ」

才人の質問に、俺が即答する。すると、他の女達が一斉に頷く。

「俺かよ……はあ」

溜め息をひとつ吐くと、才人は諦め顔でキュルケの安物剣を鞘から抜いた。

ビュンッ！

で、『ガンダールブパワー』で素早く廃屋に駆け寄り、窓から中を覗き込む。

そして凡そ10秒程して、才人は頭の上で腕をクロス　誰もいない合図を出した。

ガサツ……

俺達は、茂みから出て小屋に近づく。

「誰もいないよ」

才人が窓を指さして言った。そりゃ、フーケは俺達の間近にいるんだから、この中にはいないわな。

「……………」

タバサが、ドアの前に立ち、杖を振って『ディテクト・マジック探知』を使う。

「畏はないみたい」

そう呟いてドアを開け、中に入って行った。キュルケと才人も続く。

「私は外を見張るわ」

ルイズは外に残った。

そして俺は……

「じゃあ、俺とミス・ロングビルは辺りを偵察してくる」

そして、僅かに戸惑うロングビルと連れ立って、俺は再び森に入った。

「それではミスタ・グラモン、私は向こうの方を偵察してきますので……」

体よく一人になろうたってそうはいかんぞ。

「偵察なんか必要ない。『土くれ』のフーケはここにいるんだからな」

「っ……ど、どういうことですか!？」

「下手な芝居でしらはつくれるんじゃない。あいつらは気付いてないが、俺はあんたが『土くれ』のフーケだと分かっているんだよ、ロングビル。それとも、マチルダと呼んだ方がいいか？」

「……っ!？」

さすがに隠しきれなかったようで、驚き目を見開き、そして警戒の表情になるロングビル……いや、マチルダ。

「……どこで、その名前を知ったの？」

「情報源は明かせない。だが、俺は隠れた情報通だ。あんたの事は色々知ってるぞ、マチルダ・オブ・サウスゴータ」

「……お見通しってワケ」

マチルダは俺を鋭く睨みつけると、いつでも戦闘態勢が取れる姿勢になる。

まあ、当然だな。いきなり思いもしなかったところから、過去の自分の名前が出て来たんだ。何を言い出すかわかったもんじゃないと思うのが普通。

「そう睨むなよ。俺は別に、それを言い触らしたりはしないし、あんた……つまり『土くれ』のフーケをとっ捕まえようとも思っていないだ」

「……じゃあ、何が狙いよ？」

さて、ようやく交渉の始まりだ。

「簡単な話さ。マチルダ、あんたを雇いたい」

「はあ？」

おお、見事な間抜け面！目が点になっている！

まあ、マチルダの間抜け面は置いて……交渉の続きだ。

「もちろん、相応の報酬を用意する。先ず……あんた今、ウエストウッドの孤児院で子供達を養っているだろう？」

「……そんなことまで知ってるのかい？」

「まあな。で、その子供達だが……俺が養ってやる」

「なんだって？」

「こつ見えて俺は隠れ金持ちでな。トリステイン国内に、幾つか屋敷も持つてる。その内の一つを、孤児院の子供達とあんたにやる。内乱続きのアルビオンよりも、ずっと安全なはずだ」

「……それは」

「更に、あんたには給料として月100エキュー払う」

「っ！？……へ、へえ、随分と高給じゃないの」

マチルダが少し震えながら言った。

まあ無理もない。月100エキューという事は、年間1200エキューということ……つまり『シュヴァリエ』の年金の倍以上。

今、マチルダは迷っているはずだ。俺の話が本当なら良い話だが、こつという話には『裏』があるものと、彼女は知っている。

「……ひとつ、聞いてもいい？」

「ひとつと言わず、幾らでも聞いてくれ。答えるかどうかは、質問の内容次第だけだな」

「……じゃあ遠慮なく聞くよ。あんた、何であたしにそんな話を持ち掛けるの？盗賊のあたしを、そんな至れり尽せりの高待遇で雇お

うなんて、普通考えないわ。何か……裏があるんじゃない？」

ほらな。

この場で俺の首を狙わないのは、多分、俺の得体が知れないからだろう。下手に手を出すと、何をするかわからない……。

マチルダは、過去の経験から『貴族』つてものを嫌悪している。そして同時に、人を疑ってかかるのが癖になっているはずだ。

だからこそ、慎重　わざわざ敷を突いて、蛇を出すような真似はしない。そして、それは俺も同じ。

「勿論、いくら俺が金持ちだからって、誰でも彼でもせつせと助けるほど、お人好しじゃない。俺にも計画ってものがあるんだ」

「計画？」

「なあに、大したことじゃない……。ウザったいブリミル教と、その総本山であるロマリアに消えてもらう計画だ」

「な、なんですってっ！？」

マチルダがまた目を見開いた。

ブリミル教殲滅計画　これは、俺がこの17年の間に考えてきた計画だ。その全貌はまだ伏せておくが、上手くいけばこのハルケギニアが抱える問題の大部分が解決できる。

王様になろうとか、新しい宗教を立ち上げて教祖の座に納まろう

とか、そんな事は考えていない。

だが、俺は今のブリミル教とロマリアがどうにも我慢ならない。現教皇のヴィットーリオは、確かに『先』の事を考えて強引な手段を使わざるを得なかったのかも知れないが……それでも気に入らないものは気に入らない。

俺の計画なら、あいつらみたいな強引な手段を使わず、平和的に問題を解決できる。

「マチルダ……あんたは今のロマリアやブリミル教をどう思う？司教どもは『異端審問』をタテに威張り散らし、エルフをただひたすら『恐ろしい敵』だという認識をすり込んで民心を誑かした……。過去何度も『聖戦』なんてくだらない戦争を起こしては、ハルケギニアを疲弊させてきた……。こんな国や宗教が、正しいと思うか？」

「……宗教云々は、正直あたしはどうでもいいんだけど……、そうだね……。あたしもロマリアはいけ好かないよ。あたしが貴族の名を失ったのも、元を辿ればその所為だからね」

マチルダの実家 サウスゴータ家は元アルビオン貴族で、彼女の父親はサウスゴータ太守だった。そして、今は亡きアルビオン王弟モード大公に仕えていた。その繋がりで、サウスゴータ家はティファニアとその母親であるエルフの女性を自分らの領地に匿い、アルビオン国王によって家名を取り潰された。

何とか逃げ延びたマチルダとティファニアも、出自を隠し、身を隠し、ひっそりと生きていく事を余儀なくされている。

俺もこれから、あと精々5、60年ぐらいの人生をこのハルケギ

ニアで生きていく。生きていくからには、もっと住み良い世界であつて欲しい。

だから……

「だから、俺はブリミル教をまとめて叩き潰す計画を立てた。その為にはマチルダ……あなたの協力が必要なんだ。俺に手を貸してくれないか？」

「……確かに、あんたの話は面白かったわ。だけど……あんたが信用できるかどうかは別よ。それにそんな大それた計画を、たかが学生のあるたに、本当にやれるのかってという疑問もあるしね」

まあ、そう簡単に首を縦に振ってはくれないか。

だが、力を示す方法はある。

「だったら、一つ勝負をしないか？」

「勝負？」

「そうだ。これからあんたは、俺達を土ゴーレムで襲う。そして俺がゴーレムで応戦する。俺達が倒れたらあんたの勝ち、俺が土ゴーレムを撃退したら俺の勝ち。あんたが勝った場合、その先は好きにすればいい。俺が勝ったら、あんたは俺の下で働いて俺の計画に協力する。どうだ？これで少なくとも、俺の実力を知る事が出来るぞ？」

「ふうん……」

『面白いじゃない……』と、マチルダの目が言っていた。

マチルダにも、フーケとして数多の貴族達から財宝を巻き上げてきたプライドがあるんだろう。自分の実力にも、相応の自信があると見た。

だからこそ、勝負を持ち掛けた訳だが……。

「……いいわ。その勝負、乗ってあげる」

交渉成立　魔法のガチバトルなら、俺は負けない。これでマチルダはゲットだ。

「……勝負を承諾した以上、約束は守れよ？」

「ええ」

余裕の笑み……、俺に負ける事なんかほとんど考えてないな、マチルダ。

だが残念！俺は、チート能力保持者『白金』しろがねのギーシュ！いよいよ、俺の二つ名の由来を見せる時が来た。

「じゃあ……俺が小屋に戻ったら、勝負開始だ」

「いいわ。言うておくけど、手加減はしないわよ」

「それは俺も同じ事だ」

俺とマチルダは、お互いに挑発的な笑みを浮かべ合って、その場

で別れた。

そして、俺はルイズ達と合流する。

既に、キュルケ、タバサ、才人の三人は廃墟から出て来ていた。
しかも『ロケット・ランチャー破壊の杖』を携えて……。

「ギーシュ！どうだった？フーケはいた？」

「……………」

尋ねてきたキュルケに、俺は両手を上げて、肩を竦めてみせた。

と、その時

ズゴゴゴゴ……

背後で何かがせり上がる気配……………！

振り返ると……………土が盛り上がり、30メートルの土ゴーレムが現れた。

「フーケのゴーレムだわ！」

キュルケが叫ぶ。

すかさずタバサが呪文を呟き、杖を振った。

ゴオオオオツ！！

タバサの杖の先から竜巻が巻き起こり、ゴーレムにぶつかる。

しかし、ゴーレムはビクともしない。

それを見て、キュルケも杖を胸の谷間から抜き出し、呪文を呟く。

「『ファイヤー』！！」

杖の先から火炎が飛び、ゴーレムに当たる。

ポオオオツ！

だが、ゴーレムは表面が焦げただけで、殆ど利いていない。

「お前ら、下がってる！俺がやる！」

俺はゴーレムの前に立ち、杖を構える。

「下がってるって……！無理よこんなの！」

「退却」

キュルケとタバサが言うと、空からシルフィードが降りてきた。

後ろを振り返ってみると、キュルケとタバサがさっさとその背中に登り、才人もルイズの手を引いてその傍に行く。

「おい、ギーシュ！何やってんだ！？早く来いよ！」

才人が俺を呼ぶが、俺は逃げる必要はない。

何故なら……この勝負、俺が勝つからだ。

「いいから、お前ら下がって見てろ！」

杖を地面に突き立てる様に構え、呪文を呟く。

カアアツ！！

俺を中心に、広範囲の地面が光り輝く。

「な、なんだっ！？」

シルフィードに乗り込んだ才人が声を上げる。

「これから見る事は、学院のみんなには口外厳禁だぞっ！」

学院にバレると、騒がれて面倒だからな。

才人達に念を押し、俺は魔法を完成させる。

さあ、本邦初公開……これが俺の本領、『クリエイト・ゴーレム』
による最大最強のゴーレム！！

「出ですよッ！白金の『破壊男爵』ッ！！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！！！！

光る地面から、そいつはせり上がる様に現れた。

全身を覆う銀白色の全身甲冑フルプレートアーマー、筋骨隆々の太い腕、背中にはためく甲冑にV字に横線が入った留め具で留められた巨大マント、身長57メートル、体重550トン（計った事ないけど）の巨大口ポ……もとい、巨大ゴーレム！！

元ネタは勿論『武装錬金』は、坂口照星の全身甲冑フルプレートアーマーの武装錬金である。

ちなみに『白金しろがね』と銘打っちゃいるが、白金製プラチナではない。白金はモース硬度4.5で、鉄より若干固いがソレ単体だとそんなに高い強度を持っている訳ではないんだ。

勿論、全部白金プラチナで作る事もできるが……俺の破壊男爵バスターバロンはもっと凄い金属で出来ている。

こいつを形成するメイン素材は『タングステン』というモース硬度7.5を誇る希少金属レアメタルだ。

前世の頃にふと『世界一固い金属って何だろう？』と思い、インターネットで調べて知った。戦車の装甲や、対戦車用・対艦用の徹甲弾の弾芯にも使われていたらしいぞ。

「巨大口ポおー……ツツツ！！??？」

「なにアレえ……ツツツ！！??？」

聞こえてきたのは驚きの声……。最初のは才人で、次にハモっていたのはキュルケとルイズだ。

俺は破壊男爵バスターバロンの頭の上に立って、周囲を飛ぶシルフィードに目を向ける。

「こいつが俺の切り札、白金しろがねの『破壊男爵』バスターバロンだ！さっきも言ったが、学院の連中には内緒だぞつー！！」

まあ、実際に見なければ信じやしないとは思うが……。

それはさておき、とつとつこの勝負に決着ケリをつけるとしよう。

破壊男爵バスターバロンで、マチルダの土ゴーレムを見下ろす。土ゴーレムは、こつちを見上げながら固まっていた。

なんせ土ゴーレムは、破壊男爵バスターバロンの半分ぐらいの背丈しかない。大人と子供ほどの差がある。

「……やれ、破壊男爵バスターバロン」

グワツ！

俺の命令で、破壊男爵バスターバロンが拳を握り込み、その剛腕を振り上げる。

そして……

ブウンツツ！！

風を切る音を上げながら、振り下ろした。

ズガアアアアアンツツツ！！！！！！

だが、じいさんは申し訳なさそうに言っていたが……、フーケを捕えたならともかく、学院が奪われた宝物を取り戻したただけでは、『シュヴァリエ』の爵位申請は流石に無理、だそうだ。

キュルケとルイズは少し残念そうにしていたが、元々『シュヴァリエ』のタバサや地球人の才人、そして……既に目的を達している俺は、普通にしていた。

俺の今回の目的は、信頼できる実力と性根を持った人材　つま
りマチルダの確保だ。

それが果たせた以上、御の字というところだろう。

そして、今日のもう一つのイベント　『フリッグの舞踏会』の
時間。

アルヴィーズの食堂の上階のホール、豪華な料理が並べられ、着飾った生徒や教師がダンスやら談笑やら……。

キュルケは男を侍らせ、タバサは料理を食いまくり、才人はバルコニーで黄昏、ルイズはまだ現れてない。

俺はダンスの誘いを断りつつ、飲み食い……ふむ、ちょっと腹いっぱいになってきたな……。

才人にでも声をかけてくるか。

「よお、どうした？随分と景気が悪そうだな」

バルコニーに行つて声をかけると、才人は本当に景気が悪そうな顔で振り返つた。

「……………ギーシュか」

「『ギーシュか』って、またテンションの低い……………」

「……………ほつとけよ」

才人がまた外を向いた。

『家に帰れるかも知れねえと期待して、思い過ごしだつたつて落ち込んでんだよ』

別のところから声が説明した。

そつちに顔を向けると、錆びたボロ剣のデルフリンガーがあつた。

しかし……………そうか。やっぱりオスマンのじいさんに、『ロケット・ランチャー破壊の杖』の事を聞いたか。

「ああ……………まあ、それはまた、なんというか……………」

「……………別に、無理に慰めてくれなくていいよ」

「そうか……………」

確かに、今の才人をどう慰めたらいいのかわからん。

虚無魔法に『ワールド・トピア世界扉』があるにはあるんだが……使い手があのヴ
イツトリーオだ。奴は才人をただで帰そうとは絶対にしない。

ルイズが使えるようになるかも知れないが、いつになるか分から
ないし……。

『ところでよ、貴族の小僧っ子。ひとつ聞きてえんだが……』

「あん？」

『なんでお前^{めえ}、俺が喋ってるのに驚かねえんだ？』

「……………あ、インテリジェンスソードか」

『遅えよッ！』

デルフリンガーがツツコミを入れてくる。

何とか咄嗟にギャグっぽく返して誤魔化したが……危ない危ない、
うっかりしていた。

俺は今の今まで、デルフリンガーが喋ったところに立ち会ってい
なかつたんだ。気をつけないとな……。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・
ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~り~~~~！」

おっ、ルイズが来たみたいだ。

さてと、じゃあ俺は退散しますか……。

「じゃあ、俺はもう行く。お前も、あんまりくよくよするなよ。いつか、良いことあるさ」

「ああ……」

生返事……。ドレス姿のルイズに目が釘付けってか。まあいい、邪魔者はさっさと退散だ。

しかし……。俺は才人から離れながら考える。

あいつら、大丈夫だろうか？土ゴーレムを俺があっさり潰したから、才人とルイズの関係が進展しない、なんて事になると……。

いや、それはあいつらの問題か。まあ、もし関係が悪化して二人がすれ違う様な事があつたら、才人は俺が保護してやるとしよう。

と、考えていた時……

「ミスタ・グラモン」

女性に声をかけられた。だが、いつもの有象無象の女共ではない。

声の主は、本日ゲットしたマチルダだ。

「こんばんは、ミス・ロングビル。黒の『ローブドソワレ』が素敵ですね」

『ローブドソワレ』っていうのは、フランス語で『イブニングド

レス』のことだ。ハルケキニアこっちの言葉はフランス語に近いらしく、この言い方で意味が伝わる。

「ありがとうございます。ミスタのタキシード姿も素敵ですよ」

「それはどうも。……で？わざわざ声をかけてきたご要件は？」

「ふふ……私とわたくし一曲、踊っていただけませんか？ジェントルマン」

恭しくドレスの両裾など持ち上げ、膝を曲げての一礼……だが、その顔は何とも挑発的な笑み。

ただダンスのお誘いってだけじゃなさそうだ。ふふん、いいだろう。

「喜んで、レディ」

俺も見た目恭しく一礼で返したが、マチルダに向けるのは挑発的な笑みだ。

そして、俺達は並んでホールへ向かい、ダンスの輪に加わる。

「……それで、このダンスのお誘いはどういう風の吹きまわしだ？」

ゆらゆらとダンスを踊りながら、周囲に聞こえない程度の音量で、俺はマチルダに尋ねた。

「あら、ご挨拶ね？こんな美人のお誘いだって言うのに」

「美人は否定しないから、自分で言うな。……真面目な話、このダンスのお誘いにはどういう意図があるんだ？」

あれだけの事があって、俺をダンスに誘うなんて、裏が無い方がおかしい。

「雇い主と親睦を深めたい、っていうのは理由にならないかしら？」

「ならなくはない。が、お前の性格を考えると、それだけが理由とは到底思えないな」

「あら、言ってくれるじゃない」

「事実だろう」

「まあね」

クルツと回りながら、不敵に笑い合う俺達……。

「じゃあ、本題に入るけど……あの時、あんたが言ったこと、本気かい？」

「どのことを言っているのか知らないが、お前に言った事は全部本気だ」

「……信じて、良いんだろうね？」

「勿論だ。間違っても、お前らを王国に売ったりは絶対にしない」

「……取りあえず、信じておくわ」

「結構」

話を終えた俺とマチルダは、そのまま音楽が終わるまでダンスを踊り続けた。

だが……その日の事は、かなり注目を集めていたらしく……。

翌日、俺が歳上趣味で、ミス・ロングビルとデキているとかいうあらぬ噂が流れてしまった……。

当然、力尽くで揉み消したが……、とんでもないオチがついたもんだ。

エピソード4 人材確保……（後書き）

マチルダ、ゲットだぜ！という回でした。

この先、原作の流れを利用しながら、ロマリアを陥れる計画が進んでいきます。

これ以降、ヴィットーリオやジュリオのファンの方には、不快な表現が出てくるかもしれませんが、ご注意ください。

エピソード5 アルビオンへ……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多々あります。その点をご理解の上で、お読みください。

今回、アンチアンリエッタ分多めです。ご注意ください。

エピソード5 アルビオンへ……

エピソード5

フーケ事件が終わってから数日が経過……。

俺の介入で、幾らか原作とは状況が変化している。

先ず、マチルダの事 フーケとして捕まらなかったので、あいつは今まで通り、学院でオスマンじいさんの秘書として働いているが、今は学院にはいない。

あいつには今、アルビオンに行ってもらっている。目的は、ティファニア達の迎えと……アルビオン王家保有の始祖の秘宝『始祖のオルゴール』の奪取だ。

その為に必要な費用と、ある小道具を渡してある。

「なんだい？この指輪は？」

「『アンドバリの指輪』って知ってるか？」

「え？ええ……ラグドリアン湖の『水の精霊』が守ってるっていうアレでしょ？」

「そうだ。生きた人間は生きてまま、死んだ人間には偽りの命を与えて、意のままに操るマジックアイテム……」

「ま、まさか……、これが……？」

「いや、違う。それは俺が『アンドバリの指輪』を真似て作ったマジックアイテムだ」

水系統の魔法に『制約^{ギアス}』という心を操る催眠術の魔法がある。現在は国法で『禁呪』に指定されている魔法だ。

マチルダに渡した指輪には、その魔法が込めてある。指に嵌めて念じれば、相手の精神を一時的に支配できるという代物だ。しかも、その間の記憶は飛ぶように細工してある。

マチルダの盗賊としての腕と、あの指輪があれば、警備が厳しい王国の宝物庫にも何とか忍び込めるだろう。

ちなみに、マチルダに頼んだのは『始祖のオルゴール』だけだ。

どうせ、俺も近い内にアルビオンへ向かう事になる。その時には、ウェールズはワールドに殺されているだろうから『風のルビー』を頂戴する予定だ。

何しろ、始祖関連のアイテム 特に覚醒に必要な『始祖のルビー』は、俺の計画には必要不可欠だからな。できるだけ手元に集めておきたい。

という訳で 今頃マチルダは、アルビオンに先行してニューカッスル城に向かっていている頃だろう。

で、次いでルイズと才人の事 思った通り、フーケの事件での

やり取りが無かったせいで、あいつらの関係はあまり進展が見られない。

それでも『使い魔のルーン』の効果か、元々の趣向か、才人はルイズから離れようとはしない。

ルイズも何だかんだで、多少は才人が気になってるようで、付かず離れずといったところだ。この程度の差異なら、問題になる事はないだろう。

そんな感じで、迎えた今日　トリステインの王女アンリエッタがやってくる日。

嫌味のギターの授業の最中のこと……。

「あややや、ミスタ・ギター！失礼しますぞ！」

金髪ロールのツラを被り、ゴテゴテしたローブで着飾っているツモリのコルベールのオッサンが乱入してきた。

「おっほん。今日の授業はすべて中止であります！」

そう言った後……

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

と、のけ反った拍子にツラが落ちて……

「滑りやすい」

タバサの一言で教室が爆笑の渦に包まれたのは、原作通りの展開。俺は前世で『ドリフの大爆笑』を見て、お笑いにはちょっとうるさいから、あの程度では笑わなかったが。

「黙りなさい！ええい！黙りなさい小童どもが！大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！貴族は可笑しい時は下を向いてこっそりと笑うものですぞ！これでは王室に教育の成果が疑われる！」

で、気にしていた頭の事を笑われてコルベールのオッサンが怒鳴り散らして、教室が静粛に　オッサンも気を取り直して説明を続けた。

「えーおほん。皆さん、本日はトリスティン魔法学院にとって、良き日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります」

コルベールのオッサンは横を向くと、あの格好で後ろ手に手を組む。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリスティンがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

はい、アルビオン行き　『風のルビー』回収フラグ来ました。

「したがって、粗相があつてはいけません。急なことですが、今から全力を挙げて、歓迎式典の準備を行います。その為に本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること」

という訳で、授業は中止　俺達生徒は、準備の為に各自部屋に戻った。

と言っても、俺は改まって身だしなみを正しはせず、時間までのんびりしていただけだ。

そして……王女様ご一行が、学院にご到着あそばされやがりました……。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーーーーーりーーーーッ！」

と、呼び出しの衛士のデカイ声が響き、馬車から出てきたのは……マザリーニ枢機卿。

「……………ふん……………！」

周りの連中が一斉に鼻を鳴らす。分かりやすい奴らだ。

だが、マザリーニ枢機卿は意にも介さず、馬車の横にズれて、次いで出てきたアンリエッタの手を取った。

「……………わあー！……………」

今度は歓声……本当に分かりやすい奴らだ。

まあ、確かに見た目は綺麗だけど……、お頭つむの中がなあ。

「くあゝ……………」

思わず欠伸が出る。

「おい、ギーシュ！麗しの王女殿下が出てこられたっていうのに、欠伸をするとは何事だ!？」

傍にいたマリコルヌに怒られ……………

「相変わらずだなあ、ギーシュは……………。君は、アンリエッタ姫殿下にも興味がないのかい?」

同じく傍にいたレイナルに呆れられた……………。

「……………仕方がないだろう。幾ら見目麗しいアンリエッタ王女殿下といっても、俺達には高嶺の花……………。手が届かないと思えば、興味も持てないさ」

「はあゝ……………、相変わらず枯れてるなあ、ギーシュは」

「ほっとけ」

さっきまで怒っていたマリコルヌにも呆れられた……………。

だが気にせず、また王女一向に目をやる。すると……………王女の護衛の中に、ワルドの姿を見つけた。

羽帽子に、似合いもしない髭……………。

髭が似合っていない以外に変なところはなく、見た目は国を裏切るようなタイプには見えない。だからこそ誰も奴の裏切りに気付けないんだろっがな……。

そして、そのまま何事もなく歓迎が終わり、夜になった……。

俺は女子寮の入口が見渡せる場所に身を潜め、アンリエッタが来るのを待っていた。

そして、一時間程した時……アンリエッタはやってきた。

「……………」

キョロキョロ……

黒い頭巾をすっぽり被り、周りを警戒しながら女子寮に入っていく。

俺は、気付かれない様に気配を消して、その後を追った……。

挙動不審のアンリエッタは、塔の階段を上がり、通路の奥の突き当たりの部屋の前で止まった。俺は、通路の角に身を隠して様子を窺っている。

「……………」

キョロキョロ……

また辺りを警戒するように見渡してから、ドアを叩く。

コン……コン……コン、コン、コン

ノックをして数秒後、ドアが開いてブラウスを身に付けたルイズが出てきた。

「……」

キョロキョロ……

ルイズも辺りを見渡して警戒し、アンリエッタを招き入れた。そして、ドアが閉まる……。

「……」

暫し待つ……。今頃、アンリエッタが部屋の中で『ディテフトマジック探知』ディテフトマジックを使っているはずだ。『ディテクトマジック探知』は長くても10秒ほどで終わる。

一応、念の為20秒待つ。

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、
14、15、16、17、18、19、20……。

「……よし、『サイレント消音』」

フッ……

俺は周囲の音を消し、素早くドアの前に走った。

そして『消音』^{サイレント}を解除　　鍵穴から中の様子を窺う。

「ああ！ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀は止めて頂戴！あなたと私はお友達わたくし！お友達じゃないの！」

「もったいないお言葉でございます。姫殿下」

見れば、アンリエッタとルイズが抱き合っていた。別に、卑猥な意味じゃないぞ？

「やめて！ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をして寄って来る欲の皮の突っ張った宮廷貴族達もいないのですよ！ああ、もう、私には心を許せるお友達はいないのかしら。昔馴染みの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、私死んでしまおうわ！」

俺は王族じゃないから分からないが……王女なんていうのは、そういうものだと思うがな。

その後、ルイズとアンリエッタは昔話に花を咲かせる　　。

宮廷の庭で、泥だらけになりながら蝶を追いかけたとか……。クリーム菓子を取りあって喧嘩をしたとか……。アンリエッタの寝室で、ドレスを奪い合ったとか……。幼き日のアンリエッタのボディブローが、同じく幼かったルイズの腹に決まってKOしたとか……。

最後のはやや物騒な内容だったが、他は至って普通の仲良し同士の思い出話だ。

で、ルイズの固さが取れてきた所で、アンリエッタは本題に入る。

「結婚するのよ。私」わたくし

「……おめでとうございます」

アンリエッタもルイズも、声も表情も沈んでいて、全然めでたそうじゃない。

と、そこでアンリエッタは藁束の上に座る才人に気付いた。

「あら、ごめんなさい。もしかして、お邪魔だったかしら」

「お邪魔？どうして？」

「だって、そのの彼、あなたの恋人なのでしょう？いやだわ。私わたくしついたら、つい懐かしさにかまけて、とんだ粗相を致してしまっただみた
いね」

「はい？恋人？あの生き物が？」

「生き物って言うな」

ルイズのあんまりな言い草に、才人が抗議の声を上げる。

が、ルイズはそれを無視。

「姫さま！あれはただの使い魔です！恋人だなんて冗談じゃないわ！」

とかなんとか思いつきり否定してる割には、この後一年ぐらいかけてデレていく癖に……。

ツンデレ娘っていうのは、このツンの時期が面倒臭いから、俺は好みじゃない……。

「使い魔？」

アンリエッタはきょとんとした面で、才人を見る。

あの顔を見るに……分かっていてルイズをからかった、という訳じゃなさそうだ。

「人にしか見えませんが……」

「人です。姫さま」

才人がワザとらしくアンリエッタに一礼して見せる。顔が、何となく切なさそうだ。

そんな才人を尻目に、アンリエッタは少し可笑しそうに笑った。

「そうよね。はあ、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこ変わっていたけれど、相変わらずね」

「好きでアレを使い魔にしたわけじゃありません」

ルイズが無然として言う。

と、アンリエッタは笑みを潜め、再びこれ見よがしに溜め息を吐いた。

ようやく本題に入るな……。

「姫さま、どうなさったんですか？」

「いえ、なんでもないわ。ごめんなさいね……、嫌だわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるようなことじゃないのに……、私わたくしつてば……」

「仰ってください。あんなに明るかった姫さまが、そんな風に溜め息を吐くってことは、何かとんでもないお悩みがお有りなのでしょう?」

「悩みなんて大層なものじゃない。軽率な行動を取った結果……ただの自業自得だ。」

「……いえ、話せません。悩みがあると言ったことは忘れて頂戴。ルイズ」

「いけません！昔は何でも話し合ったじゃございませんか！私をお友達と呼んで下さったのは姫さまです。そのお友達に、悩みを話せないのですか？」

ルイズがそう言うと、アンリエッタは嬉しそうに微笑む。

「私わたくしをお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とて

も嬉しいわ」

ヤバい……。この二人のやり取り、ウザすぎる。

ルイズもアンリエッタもいつそ死んでしまえ、と思ってしまった。くそ、計画の内であれば見捨てられたものを……。

「今から話すことは、誰にも話してはいけません」

アンリエッタはそう言うと、才人をチラッと見た。

「席、外そうか？」

才人が気を利かせて言うが、アンリエッタは首を振る。

「いえ、メイジにとって使い魔は一心同体。席を外す理由はありません」

そして、アンリエッタは語り出した。

自分が軍事同盟締結の為に、ゲルマニア皇帝に嫁ぐことに決まったこと……。それが革命完了間近のアルビオンへの対処であること……。トリステイン侵攻を目論んでいるアルビオンは、アンリエッタとゲルマニア皇帝の婚姻　つまり軍事同盟の締結を阻止しようと血眼になってその材料を探していることを……。

やれやれ……。遠回りに遠回りして、ようやく肝心の話に入ったな。

「で、もしかして、姫さまの婚姻を妨げるような材料が？」

ルイズが蒼い顔で尋ねると、アンリエッタは俯き加減で頷いた。

「おお、始祖ブリミルよ……、この不幸な姫をお救い下さい……」

何が不幸な姫だ、クソツたれが……。利用価値が無くなったら、真っ先に見捨ててやる……！

「言つて！姫さま！一体、姫さまのご婚姻を妨げる材料つて何なのですか？」

興奮気味に尋ねるルイズに、アンリエッタは両手で顔を覆ったまま呟き答えた。

「……私が以前したためた一通の手紙なのです」

「手紙？」

「そうです……」

そしてアンリエッタは、自分の口からはソレが『ラブレター』だとは言わなかったものの、ソレがゲルマニア皇室に渡れば婚姻も軍事同盟も反故になるであろうこと……、ソレがウエールズの手元にあることをルイズに告げた。

「ああ！破滅です！ウエールズ皇太子は、遅かれ早かれ、反乱勢に囚われてしまうわ！そうしたら、あの手紙も明るみに出てしまう！そうなったら破滅です！破滅なのです！同盟ならずして、トリステインは一国でアルビオンと対峙せねばなりません！」

「では、姫さま、私に頼みたい事というのは……」

「無理よ！無理よルイズ！私わたくしったら、なんてことでしょう！混乱しているんだわ！考えてみれば、貴族と王党派が争いを繰り広げられているアルビオンに赴くなんて危険なこと、頼める訳がありませんわ！」

「しっかり言ってるじゃないか……。全く、ツッコミどころ満載だな。」

「何を仰います！例え地獄の釜の中だろうが、竜の顎あごの中だろうが、姫さまの御為とあらば、何処なりと向かいますわ！姫さまとトリステインの危機を、このラ・ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ、見過ごすわけには参りません！」

ルイズは跪いて頭を下げる。

「『土くれ』のフーケを退けた、この私わたくしめに、その一件、是非ともお任せ下さいますよう」

それは俺だろうが……。ルイズも大概だな……。

「ちょっと早いけど、もう出ていくか……。このぐらいなら大丈夫だろう。」

「『アンロック』」

魔法で鍵を開け、俺はドアを開け放った。

ガチャッ！

「自分一人でフーケを退けた様な言い方は、聞き捨てならんな、ルイズ」

「ギーシュ！？あんた！まさか立ち聞きしてたの！？今の話を！」

「立ち聞きなんかしていない。俺はドアの前に座^まって、今話を聞いていたんだ」

「どつちでも同じでしょッ！！」

まあ、その通りだが……ルイズのツツコミは取りあえず無視だ。

俺はアンリエッタの前に恭しく膝をつく。

「アンリエッタ王女殿下、御尊顔を拝悦でき、恐悦至極に存じます。先ず、あのような重大なお話を、曲者の如く盗み聞きしたご無礼をお詫びいたします」

正直、こうしてアンリエッタに跪くのは反吐が出る思いだが……今は仕方がない、我慢する。

「まあ、ご丁寧にどうも。ですが……、今話を聞かれたのは……」
アンリエッタが困った顔をする。

「……あなたのお名前を窺ってもよろしいですか？」

「これは、失礼を。申し遅れました。私^{わたくし}、ギーシュ・ド・グラモン

と申します」

「グラモン？もしか……あの、グラモン元帥の？」

「不肖の四男でございます」

さて、自己紹介はこれでよし。さっさと本題に入ろう。

「殿下。先程仰っておられた困難な任務……、是非ともこのギーシユにも、ご命じ下さいよう」

「え？あなたが？」

「はっ。若輩の身なれど、私もトリスティン貴族として、殿下の役に立ちとう存じます。何とぞ」

言って頭を下げる。必要な芝居だと、割り切つてな……。

「あなたも、私の力わたくしになってくれるというの？」

「微力ながら」

「ありがとうございます。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。ではお願いしますわ。この不幸な姫をお助け下さい、ギーシユさん」

「御意」

アンリエッタやウエールズなんかはどうでもいいが、これでアルビオンに行ける……。

この後の展開は多少の誤差はあっても概ね分かっているし、『風のルビー』は頂きだな。『始祖のオルゴール』は、マチルダが首尾よくやってくれているといいんだが……それはあいつを信用しよう。

「では、明日の朝、アルビオンに向かって出発すると致します」

今まで黙っていたルイズが、唐突に話を締めた。

「ウエールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞き及びます」

「了解しました。以前、姉達とアルビオンを旅したことがございます故、地理には明るいかと存じます」

そんな地理は、アテにならない。どうせ、そんなものは関係なくルイズ達はウエールズに接触できるから問題ない。

「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族達は、あなた方の目的を知ったら、ありとあらゆる手を使って妨害しようとするでしょう」

アンリエッタはそう言うと、机に着き、羽ペンと紙で……ああ、羊皮紙な。それでウエールズへの手紙を書き始めた。

しかし、妨害か……。雇われた傭兵なんざどうともなるが、厄介なのは……やはりワールドか。

今は原作と違いは、奴とマチルダが接触していない。そして、才人の事前情報を手に入れていない。だが……原作ではワールドは、

ルイズが『虚無の担い手』であることを、どうやって知ったのかは分からんが、だいぶ前から知っていた風だった。

なら、その使い魔である才人の能力にも、ある程度は当たりを付けていると考えるべきか……。

だが……うん。この程度の差異なら、それほど大きな影響はないか。

この後、アンリエッタの馬鹿が、ワルドをルイズの護衛に付けるはずだ。アルビオン貴族派に通じている奴にとっては、またとない絶好のチャンスのはず……、動かないはずがない。

才人を侮る分には、奴に隙が出来て悪い事はないし……。俺は恐らく眼中にないはず……。

もしかすると、ラ・ロシエールの宿で襲って来る時に、マチルダの土ゴレムに代わって奴の『^{ユビキタス}遍在』と戦うことになるかもしれないが……、あの襲撃の目的は、俺達とルイズ達の分断とその時間稼ぎ 無闇に俺達と全力で戦うとは考え難い。

色々な状況から考えるに……取りあえず、奴が直接俺の障害になることは、ほぼないと言って良いと思う。原作の流れを元に行動すれば、計画は上手くいくはずだ。

「ウエールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡してください。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

と、俺の中で結論が出た所で、アンリエッタが書いた手紙をルイズに渡した。

更に、アンリエッタは右手の薬指から『水のルビー』を引き抜いて、それもルイズに手渡す。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金にあててください」

アンリエッタは『水のルビー』をただの宝石程度にしか思っていない。王家伝来の秘宝を、勝手に売り払う許可を出すとは……トリスティンも先行き不安だな……。

この『水のルビー』も頂戴しても良いんだが……、これが無いとルイズが『虚無』を覚えられないし、『ルビー』なら『もう一つ』近くにある。

手元には一つでも『始祖のルビー』があれば、計画には充分だ。放っておいても良いだろう。

「この任務にはトリスティンの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風から、あなた方を守りますように」

こうして、アルビオン行きが決まった訳だが……不確定要素が結構あって、さすがに不安だな……。

この件も、無事に片付くと良いが……。

エピソード6 ワールド現る……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多々あります。その点をご理解の上で、お読みください。

エピソード6 ワルド現る……

エピソード6

アンリエッタの尻拭いの為、アルビオンへ行くことが決まった翌朝……。

俺達は学院の門の前で、出発の準備を整えていた。

いつもの制服に足下は乗馬用のブーツを履き、馬に鞍を付け、必要な荷物を纏めて括りつける。そして、それが完了した後……

「行ってくるからな、サンガ。良い子に留守番しているんだぞ」

サンガはデッカくて目立つから、この旅には連れていけない。学院で留守番だ。

『フギヤウ………』

寂しそうな鳴き声を上げるサンガの頭を撫でてやる。

サンガは俺の言うことはちゃんと聞くからいいとして……、ルイズと才人を見る。

ルイズは、良く言えば凄い意気込み……、悪く言えば気負い過ぎ……。そんな固い表情だ。今からあんなんじゃない、息切れすると思っ
がなあ……。

才人は……馬に鞍を付けながら、既に疲れた顔をしている。アルビオンへの道のり（その間の乗馬による腰へのダメージ）に不安を感じているらしい。頑張れ、ガンダールヴ。

「おーい！二人とも、準備できたか？」

「とつくに終わってるわ」

「おーう……」

情けない声で返事をするな、才人。

「よし、じゃあ行くか」

そろそろ、ワルドも現れる頃だろう……。

ブワツ……！！

ほら来た！

朝靄が揺らいで、デカい気配が降りてきた。そして、少ししてワルドが現れた……。

「やあ、おはよう、諸君。僕は姫殿下より、君達に同行することを命じられた女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊長、ワルド子爵だ」

ワルドは帽子を取って一礼する。

「……………」

チラッと才人を見てみると……、少し驚いて、しかも何やら警戒している様子だ。

ワールドに見覚えがあるようだ。それに……奴に対するルイズの態度も。

「ワールド様……」

馬の傍にいたルイズが、少し震えた声で名を呼ぶ。と、ワールドはワザとらしいぐらいに破顔して、両腕を広げた。

「久しぶりだな！ルイズ！僕のルイズ！」

そう言って駆け寄り、ガバツと……。

才人は……あゝあ、大口開けて……。いきなり抱き上げられる、なんていう行為を半ば受け入れているルイズを見てか、顔が間拔けな事になっている。

「相変わらず軽いな君は！まるで羽の様だね！」

「……お恥ずかしいですわ」

ポツと頬を染めて、『ですわ』ときたもんだ。いつものルイズじゃない……。

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ワールドがルイズを下ろし、帽子を被りなおして言った。

「あ、あの……、ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のサイトです」
ルイズの紹介に、俺はお辞儀で返した。才人の方は見えないから分からん。

顔を上げてみると、案の定、ワルドは俺の事は眼中にない様で、才人を興味深そうに見ている。

「君がルイズの使い魔かい？人とは思わなかったな」

気さくな感じだ……。声の感じは、気さくな中にも本当に驚いているようにも思える。

「僕の婚約者がお世話になっているよ」

「こ、婚約者あ……！？」

バツ！

才人が目を剥いて、ルイズを見る。

「……………」

ルイズは頬を染めたまま、フイと顔を逸らした。で、才人はまたワルドを見る。

と、その顔が段々と諦めの色を帯び始め、終いには溜め息を吐いた……。自分との差を悟ったな。

そんな様子を知ってか知らずか、ワルドはニツコリと笑い、才人の肩をポンポンと叩く。

「どうした？もしかして、アルビオンに行くのが怖いのかい？なかに！何も怖い事なんかあるもんか。君達はあるの『土くれ』のフーケを退けたんだろ？その勇気があれば、なんだってできるさ！」

そしてワルドは豪快に笑い飛ばす。才人は、何やら悔しそうで寂しそうな、複雑な表情を浮かべていた。

それにしても……アンリエッタ、いやこの場合は王室全体か。とにかく、こんな簡単に情報が裏切り者に漏れるとは……政治中枢が虫食い状態だなんて、この国に暮らしている身としては冗談じゃないぜ。

中世ヨーロッパレベルの国家の情報管理レベルじゃ、無理もないかもしれないが……。

「ピイツ！」

ワルドが口笛を吹く。すると、朝靄の中からグリフォンが歩いて来た。

「おいで、ルイズ」

グリフォンにひらりと跨り、ワルドはルイズを手招きした。

さあて、俺も馬に乗るか……。

その後、ルイズは躊躇いモジモジしつつもワルドに抱きかかえられてグリフォンに……、才人はそんな様子に悔しげな顔をしつつも自分の馬に跨り、ようやく出発となった。

で、それから、半日……。ワルドは、俺や才人の事なんて、まるで気にせずグリフォンを飛ばし続けている。

途中の駅で二回、俺達は馬を交換したが……ワルドのグリフォンは全く速度が落ちない。このペースだと、今日中にラ・ロシエールに到着しちまうな。

俺はまあ大丈夫だが、才人は……

「……………」

駄目だな……。俺の左隣りで、馬の首にぐったりと寄りかかってしがみ付いている。

「おい、大丈夫か、才人？」

「お〜う〜……………」

死んでるなあ……。でも、時々、ワルドとルイズの様子を窺っているところは流石と言つべきか。

ここからじゃ聞こえないが、ワルドとルイズは今頃、昔の思い出話を中心に盛り上がってるんだろう。ワルドがルイズを口説きながら、な。

「かなり気になるみたいだな？あの二人の様子が」

「あ？ど、どーゆー意味だよ！？」

俺がちよつと意味ありげに声をかけると、才人が馬から身を起こした。

「言葉通りの意味だ。さつきから、ぐったりしてる癖にチラチラあの二人の様子を、何度も何度も窺っていたこと、この俺が気付いてないとも思ってたか？」

「う、うるせえ！」

「やれやれ、分かりやすい動揺の仕方だな。ルイズのどこが気に入ったんだ？お前、あいつには随分、ぞんざいに扱われているみたいだが」

「だからうるせえって！大体俺はあんなやつ、好きでも何でもねえよ。ま、確かに顔はちよつと可愛いけど、性格最悪」

うん、まあ、この頃のルイズに関しては同感だ。

だが、才人も『意地っ張り』な部分は似たり寄ったり……、ルイズの事をとやかく言えた義理じゃない。

ふむ……少し、からかつてやるか。

「はっ！まさか……お前、虐められることに興奮するマゾヒストか！？」

「誰がマゾヒストだッ!!」

「そうか、そうだったのか。しかもルイズの外見から察するに、さ
ては幼女趣味も持っているな?このド変態が」

「うがぁあッ!!」

才人は咆哮を上げて、馬から直接飛びかかってきた。なんだ、元
気じゃないか。

だが、残念 『ガンダールヴパワー』無しの才人なんざ、俺の
敵じゃない。

ビシッ!バシッ!ベンッ!

「だッ!?!ぶッ!?!るッ!?!」

眉間への左チョップ、右のビンタ、上から左の叩き落とし、の三
連撃が綺麗に決まり、才人は地面に落ちた。

「ふん、俺に襲いかかるうなんざ100年早いわ」

「ぐ、ぐぞう……!」

「こら!置いてくぞ!」

ルイズを口説いていたワールドが怒号を放った、と……はいはい。

「だよ。才人、早く馬に戻れ」

「おう……」

ワルドに怒鳴られたのが気に入らないのか、それともその原因を作った俺に指図されたのが納得いかないのか、才人はブスっとして答え、馬に跨る。

と、その様子を見ていたら、才人がファイと顔を背けた。

なんだ？と思って振り返ると、ワルドに抱えられていたルイズがいた。やれやれ、本っ当に意地っ張りだな……ルイズも、才人も。全く呆れた奴らだ。

そんなこんなで、ワルドは終始マイペースで先を急ぎ 俺達は
その日の夕方にラ・ロシエールに到着した。

「なんで港町なのに山なんだよ？」

才人が周りの岩山や、その中に彫り込まれた様な建物を見て言った。

「山に港があるからだ」

「だから、なんで？」

「山に港が造られたからだ」

「答えになつてねえよ」

「気にするな。理由は、船着き場まで行けば分かる」

才人の質問を、のらりくらりとかわしながら、俺は辺りに注意を払う。

と、その時だった。

ポウッ！

崖の上から、松明が落ちてきた。ワルドに雇われた傭兵どものお出ました！

『ヒヒイーンッ！？？』

「うわぁっ！？」「くっっ！」

松明の火に驚いた馬が暴れ、俺と才人は振り落とされた。まあ、俺は落とされる前に飛び降りたが。

ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！

風を切る様な音……矢か！

「ふんッ！」

俺は咄嗟に杖を振り、地面に鉄の壁を生やしてガードする。

カンッ！カカンッ！

壁に矢が当たる音が響く。

「さ、サンキュー、ギーシュ！助かった」

「いい。だが、面倒な事になったな」

壁の陰に隠れて傭兵どもの様子を窺う。俺が壁を作ったからか、それともワルドの打ち合わせなのか、もう矢を撃ってこない。

「あんな奴ら、お前のバスターバロンっていう巨大口ポ……じゃなくて、巨大ゴーレムで一撃だろ？」

こいつは……。

「アホ。こんなところで『破壊男爵』バスターバロンなんか使えるか。岩場が崩れて道が塞がるし、下手をすると街にも被害が出る」

「あ、そっか……」

「それと……ヒソヒソ（『破壊男爵』バスターバロンの事は秘密だと言っただろうが。どこで誰が聞いているか分からないんだからな？）」

「あ、わりい……」

「まったく……、口の軽い奴だ。」

特に今は、近場に裏切り者ワルドがいる。奴には、俺のことはアウト・オブ・眼中でいてもらわなければ困るんだよ。

「大丈夫か！」

ワールドが杖を掲げながら、グリフォンに乗ってやってきた。

「ご覧の通り」

短くワールドに答え、もう一度崖の上を窺う。

『相棒、寂しかったぜ……。鞘に入れっぱなしはひでえや』

その声に振り返ってみると、才人がデルFRINGERを引き抜いていた。まあ、それはいいか。

「夜盗か山賊の類か？」

「もしかしたら、アルビオンの貴族の仕業かも……」

「貴族なら、弓は使わんだろう」

「……」

ワールドとルイズの会話を聞き流しながら、俺は『援軍』の到着を待つ。

バツサバツサ……！

「到着。」

「「「うわああッ!?!」「「「ぎゃあーッ!?!」「

崖の上から野太い悲鳴　鉄の壁から顔を出して覗いてみると、崖の上の更に上に竜……シルフィードだな。

そのシルフィードの上の人影から、竜巻が舞い起こり、崖の上の野郎どもが吹き飛ばされた。

「おや、『風』の呪文じゃないか」

ワルドが呟く。

ドササッ！！

と、その少し後に傭兵どもが崖から転げ落ちてきた。

「くぐう、うう……」「」「あ、があ……」「」

呻く傭兵ども。そりゃあ、あの高さから転げ落ちてきた訳だし、死ななかつたのは幸運と言っべきだろう。

が、取りあえず身動きできない様にしておこう。

ガチーンッ！

『クリエイト・ゴーレム』の応用で、傭兵どもの両手足を鉄の枷で固める。鍵穴も継ぎ目もないから、魔法を使わないと簡単には外せない。

「シルフィード！」

ルイズの驚いた声に振りかえると、シルフィードが羽ばたいて降

りてきた。

「まあ、あつちはルイズ達に任せよう。俺は、傭兵どもを尋問だ…」

「おい、貴様ら。何故、俺達を襲ってきた？」

「……」

「顔を背ける傭兵ども……。ふん、そういう態度を取りやがるか…」

「クッククク……。ならこつちにも考えがあるぞ。」

杖を、傭兵どもの枷に向けて魔法を使う。すると……

「い、痛でッ！？いぎゃあああッッ！！??？」

傭兵どもが叫び声を上げ、のたうち始める。その両手足の枷の間からは、赤黒い血が流れている……。

俺が、魔法で枷の内側に鋭い棘を生やしたからだ。今、奴らの両手足は棘に貫かれている状態なのだ。

腕は手首の動脈が裂け、足はアキレス腱が切れている……。

「もう一度だけ聞けぞ。何故、俺達を襲ってきた？」

「……お、俺達や盗賊だ。盗賊が、金目のもん持ってそんな奴らを襲って何が悪い……！」

痛みに顔を歪めたりリーダー格の男が、俺の質問に若干ドモリながら答えた。

「……………」

俺は努めて冷めた目で、傭兵どもを見下ろす。

そして……………無言で杖を向けた。

「……………ひ、ヒイツー!!?」「……………」

恐れ戦く傭兵ども……………。俺は、できる限り静かで低い声で問いかける。

「聞くのは三度までだ。正直に答えろ……………、誰に頼まれた?」

一度目……………。

「だ、誰にも頼まれてねえよ……………」

傭兵はシラを切った。続いて二度目……………。

「本当か……………?」

「ほ、本当だ……………!」

まだ言わないか……………。見上げた根性だ。

「……………最後だ。本当に、誰にも頼まれていないか?」

「だから、頼まれてねえって！」

最後まで口を割らなかつた傭兵ども。

一応プロとしての意地が……。それとも最後までシラを切り通せば、何とかなると思ったのか……。まあ、どっちでもいい。

「ふん……」

俺は鼻を鳴らして、杖をしまつ。ここまで言つんだから、例え嘘とわかつていても勘弁してやるとしよう。

踵を返し、傭兵どもに背を向ける。

どうせ、放っておけばこいつらの仲間が助けに来る。例え、来なくて失血死したとしても……それはこいつらの自業自得。襲つてきたんだから、返り討ちに遭う事も覚悟の上と受け取る。

我ながら勝手なもんだと思うが、例え俺が付けた傷が原因だとしても、目の前で死なねなければ　つまり直接殺していないと思えば罪悪感は湧いてこない。

俺の性格が破綻している、とは思いたくないが……。もしかしたら、神様特典で、精神面も強化されて凶太くなっているのかもしれない　というのは、少し無責任が過ぎるか……。

とにかく、そのまま騒いでいるルイズ達のところへ戻る。キュルケが才人に抱き付いていて、ルイズがワルドと見つめ合っていた。

「子爵、あいつらは自分達をただの盗賊だ、と言っています」

「原作に近い台詞を放ると……」

「ふむ……、なら捨て置こう」

ワルドも原作通りの言葉を吐く。そしてグリフォンに跨り、またルイズを抱きかかえた。

「今日はラ・ロシエールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡るぞ」

という訳で、俺と才人は各々の馬に、キュルケは才人の後ろに、タバサは本を読みながら自分のシルフィードに、それぞれ乗ってラ・ロシエールの街に入った。

で、取りあえず街で一番だという宿『女神の杵亭』とやらに宿泊する事になった。何故かキュルケ達も一緒に……。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと、出ないぞうだ」

棧橋に交渉に行つて戻ってきたワルドが、椅子に座りながら告げた。

「急ぎの任務なのに……」

同じくルイズも座りながらブスッと呟いた。

「あたしはアルビオンに言った事ないから分かんないけど、どうし

「明日は船が出ないの？」

「明日が『スヴェルの月夜』だからさ」

キュルケの疑問には、俺が答えた。

「それが、船とどう関係するのよ？」

「アルビオンは、『スヴェルの月夜』の翌朝にラ・ロシエールに一番近づく。だから、その時を狙って船を出すと『風石』が少なくて済んで、船乗りはその分儲かる訳だ。そんな儲かる日が2日後に迫っているから、今は船が出ないってことだよ」

「へえ、なるほどね」

「さて、じゃあ今日はもう寝よう。部屋を取った」

説明が終わりキュルケが納得したところで、ワルドがテーブルに鍵を置いた。

「キュルケとタバサは相部屋だ。そして、ギーシュとサイトが相部屋」

「……」

才人……なんだ、その目は？口には出さんがハッキリ言って、野郎と二人同室だなんて俺も嫌過ぎるんだからな。

「僕とルイズは同室だ」

「!？」

才人がバツと振りかえり、目を剥いた。

「婚約者だからな。当然だろう？」

「そんな、ダメよ！まだ、私達結婚してるわけじゃないじゃない！」

ウンウン！

才人が頷く。必死だなあ……。

しかし、ワルドは気にした様子もなく首を振り、ルイズを見つめる。

「大事な話があるんだ。二人きりで話したい」

で、俺達はそれぞれの部屋に入った……。

「ム〜〜ツ！ムゴオ〜〜ツ！！」

俺の隣のベッドで、鉄の錠で両手足が固定され、猿ぐつわを噛んだ才人が暴れている。

なんでそんな格好かという……、才人は部屋に入った後、案の定と言うべきか、ルイズとワルドの部屋を覗きに行こうとした。だが、そんな事をすればルイズの才人への好感度が激減する。

もちろん、それはそれでも構わないのだが……何となく阻止しておいた。善意か、悪意か……どっちかは当の俺にもちよつと分からない。

だが……

「ムゴゴオ〜ツ！！ムガムゴガゴオ〜ツ！！」

うるせえ……。

「……イル・ウォータル・スレイプ・クラウディ」

フワ〜

「ムガ……っ、ぐう〜……」

『スリープ・クラウド
眠りの雲』の効果で、騒いでいた才人が寝た。やれやれ、やっと静かになったか……。

才人が寝たのを確認してから、一応、拘束を解いておいてやる。

同じ体勢で寝てると身体に悪いし、明日、俺は惰眠を貪る予定なので、才人が起きた時に態々拘束を解く為^{わざ}に起こされたくない。

と、言う訳で。

「さ、俺も寝よ」

こうして、俺も静かに就寝した。

明日は、夜まで暇だな……。才人とワルドが決闘するかもしれないが、それは別にどうでもいい。勝手にやっつけてくれ。

だが、一つ気になっていることがある……。『まだ』だとは思いますが、一応、確認に行ってみるか。

エピソード6 ワルド現る……（後書き）

熱さにやられ、仕事に追われ、中々思う様に書けません。次の更新も、いつになることやら……。

それはそれとして……今回、結構多かったと思うのですが、原作に沿う場面において、主人公ギーシュが脇役に徹して動くのは、そうする必要があるので……、ということにしておいてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2539m/>

ゼロの使い魔 ギーシュとして.....

2010年10月12日15時43分発行